



朝顔日記

特 12

414

073899-000-1

特12-414

生写朝顔日記

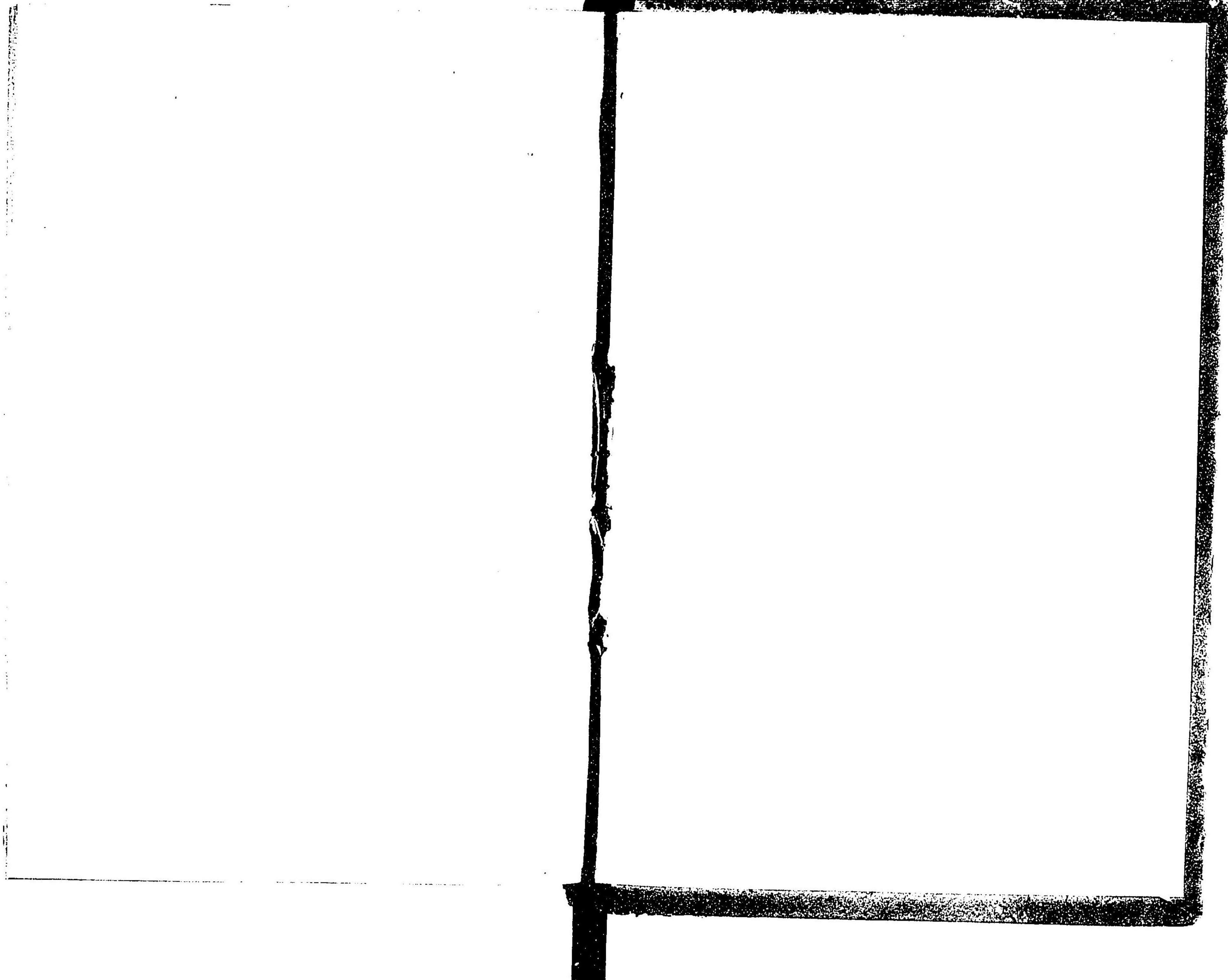
山田 案山子 / 著

M22

CEI-0640









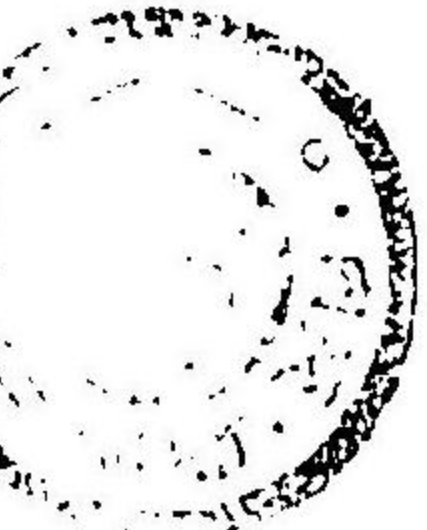
丸本夫 生寫朝顔日記

○大内館の段

№ 23161 / 22

特に 414

名妓紅弗の。李衛公が英雄を慕ひ。玉翠蓮の。張君瑞が才情を憐れむ。淫奔痴情と。笑ふ人有  
 といへ共。立通したる。誠美玉の。環を。隠しつべし。爰は鎮西の探題大内多々良之助義興  
 公。祖父の家督を請繼で。防長豊筑の大守とし。武威西國に輝けり。去頃が義興の。鎌倉に在  
 番有。本國に。後室園生の方。女ながら。一國の。政事を預る才智發明。折しも禁庭の詔使玉  
 橋の局。遙々周防へ下向われ。理應の役目山岡玄番之允。邪惡と包む衣服の綺羅。相役駒澤  
 了庵の。一家中の儒學の師範。四角四面。四方鑿。道を守りて相詰る。玉橋の局威儀を正し  
 此頃中宮御所御不例。先格の通り。當家の先祖林聖太子が相傳る。天竺者婆が所持の  
 藥王樹を。御病床。お掛置せ被度し。迎。暫時借用の御使を蒙り。局司玉橋勅書を賜はつて  
 下向せり。拜見の上。寶を早々差上られて。然るべしと。述らる。後室はつと手と突へ。家督  
 義興の。鎌倉在番の留守中。かれ共。等閑ならぬ中宮様の御惱。家老中と得と評定の上。勅答  
 申し上べしと。仰の下。駒澤了庵。何さま禁庭の勅命輕らざれど。やさば大切の國の御寶。  
 一應鎌倉へ急使をたて。通達の上と。云せも果す女養之允。ヤン過出たり駒澤。國家老たる  
 某と差置。是非の裁配片腹痛し。今も知れぬ御惱を。便々鎌倉迄。問合せ遣し。若其内  
 御登霞有。違勅の科。如何へ被る。馬鹿者の思案間にや合ぬと。威權を甲わやり込め。バ。  
 堪へぬ了庵膝立直し。國家の浮沈に係る御寶。念に念と入を。某忠義の道。お遠慮。致さぬ。  
 殿の御目鑑を以て。儒臣たる拙者と馬鹿者とい。舌長かりと。既に珍事。及ばぬ氣色。園生の









爲る怪しの男。眼燈照し近々歩行寄。お頭首尾のど呼の聲に。乗物より立出る。白髪  
 老女。四邊を詠め「チ、山蛭か。氣遣ひ仕やるな尾首の極上」チ、出来さく。チリヤモ如何  
 有と案じ。迎ひよ来やんした。それ聞て落付た。片時も早う摩耶が嶽へ「ア、コリヤ壁に  
 耳。密ふく。シテ元船の「多々羅の入江は繫いで置やんまた。然るら其方。手下共を連立  
 て先へ待て居や。何彼の符牒の元船で爲「チ、合點で御座す。シテお頭「チ、除々と跡から  
 行。早ふく」に心得て。白丁着あがら烏帽子のものがみ。亂る。國の鼠共。長柄長刀振擲げ。元  
 船投て伴ひ行。跡に老女の得色顔寶取出し打詠め「大内の重寶藥王樹。首尾よく我手に入か  
 ら。大望成就疑ひあし。此上の大内を亡し。大友の家名引興し。其虛に乗てあひよく。一  
 天四海をホ、ホ、ホ、ホ、と。獨笑して徐々ど。入江を投て行形振。怪しくも又不敵なり。  
 木蔭を竊ど以前の非人立出て。跡打詠め。ム、ハテ怪しき老女が今の振舞。「ム、正しく國家  
 を望む曲者。住家の儘摩耶が嶽。ハテナと心で點首振擲捨て見へ隠れにぞ。尾ひ行

○宇治のたん

武士の。八十宇治川と名に流れ。底の濁りも友川や。水の緑も涼し氣ふ。風吹渡る宇治橋の。  
 往來も繁き五月頃。笠狩よと来る人の。足休めやら氣をうしの。花香の此所か一森や貴賤老  
 若差別なく。沸る茶釜の湯氣に立。名さへ出花の通圓。店の人絶無りけり。浩る所へ立派の  
 武士。出家伴ひ小竹筒割子。肩に打懸是も又。床几を飯の足休め。腰打掛て膝並べ「何と月心  
 老。拙者國元々京都へ上り。儒學修行の内。ふと嵐山にて御意得しが縁と成。今で竹馬の友  
 同然。彼是と誘ひに預り。始めて見物する宇治の里。山の姿。川の流れ又格別の眺望めで御坐  
 る「チ、宮城氏の仰の通り。袖ふり合も他生の縁。イヤモ心隔ず御中有り。愚僧も風雅の友

を得て。爾着に存する。是より平等院へ參詣し。賴政の古跡扇の芝を見せやさん。併し斯見  
 晴し景色を題にして。一首所望と乞けれバ「ハア拙者も嗚呼がまし乍ら。風と浮んだる一  
 首の口吟み。腰折あがら御添削と。用意の短冊取出し。矢立の筆の走り書さらくと書認め。  
 出せば月心手に取上エ、ナン「諸人の。行ゆく橋の通路の。肌涼しき。風や吹らん」ハ、ア面  
 白き此夷曲歌。古今の本歌を取りし。秀作く。寶モ涼しき風薫る。夜なき宇治の夕景色。  
 類ひ有じと打吟じ。傍へ置バ颯と吹。風又巻れて短冊の。颯りくど颯とつ。川邊の船へ散  
 込けり。月心驚き。「ヤ是はしたり。折角の秀逸を。風又取れたり。遣まアノ船。取返さんと。立  
 を宮城の引留め「ハテ戯れの口號。御捨置下されふと。留る折しも御坐船の内を床しき。披障  
 子。透間漏来る三味の音ウツ「したひきて慕ひよるべの。笠さへ。妹背かわらで逢夜半と。重ね  
 扇の風薫る。匂ひをしたらう。驚かづらあがき。契やつくも髪「ハテ講ひ調べ。聲と云曲と云。  
 藝能器量も揃ひし美人ならん。ア、惜むらくの傍も居て聞ざる事の残念と。云に月心打笑ひ  
 「ハ、く日頃物堅い貴所もアノ音聲の泥まれし。ヤ夫の格別。先達も中通り。拙僧が和  
 歌の友。秋月之助方へ。貴所を家爲やさんと兼て咄し置しが。先も懇望貴所も承。知近  
 々日を見て。見合致させやさんイヤ是はしたり。大事の法用を破と失念致し。ヤ無禮なが  
 ら拙僧の。是々直も興聖寺へ參り。後刻菊や方よて御目懸るで御坐らう。然らバ必旅宿あ  
 て相待や。先夫迄の然バと。互に契約月心の。寺を投てぞ急ぎ行。御坐船の障子引明「ヤく  
 御察人様。まだ暮果ぬ夕景色テモ奇麗事。ナト三味線止て御覽じませと。何心なく顔さし  
 出す。舷に以前の短冊。乳人淺香の手取上。コレ御覽じませ。何所やらから短冊が船へ散込  
 ましたと。渡せば深雪手に取上「諸人の行かふ橋の通路の。肌へ涼しき風や吹らん」ホン、優







阿曾次郎のつと驚き深雪とバ。慰め職して倉卒と。船より岸へ走上り「ヤア汝の留主を預けし鹿内。慌忙しく何事成ぞ」サレバ「御本國より火急の御状と。渡せば取て封押切讀下し。大きに驚き」コリヤコレ伯父了庵より。家督を受繼。鎌倉へ下り。殿へ御諫言致し吳よとの義ハ、ア大恩ある伯父者人の頼み聞捨難しコリヤ鹿内。其方の先へ立歸り旅宿を片付。發足の用意せよ。急げ」コリヤ「へい」長まつたど達者もの。宙とんで引返と。引續いて阿曾次郎。立歸らんと走出すを。喃是待てと深雪の船より欠上り「コレヤ阿曾次郎様。云残した事か有。然て今宵の此船おと。取付款けバ「サ、尤々去あがら。聞かる。通り火急の御用。最前扇に認し。朝顔の唱歌と我と思ひ。廻り會時節を待れよ。然バと計袖ふり切。行しと爲を猶取廻り「マア」待てと留むる折しも。淺香は船頭引連れて。川邊傳ひに戻り足。勘と見るより押附「コレヤ深雪様。淺からぬ彼方のお情。御禮の足ぬの御道理あれど。人の見る前又重ねて。御禮の時節も有ら。イヤア阿曾次郎様。主人の名の秋月弓之助。必ず御出を待升る」ム、其宅の下川原。程遠からぬバ尋ねヤさん。然バくと船と陸。別れの涙悲しさに。見返る深雪と無理やりに。船へ伴ふ其所へ「コリヤ遣ぬのと以前の悪者。顯れ出て阿曾次郎が。右と左よむしやぶり付「シヤ」面倒など振解き。直よざんふと水煙。船のちやいを疾くと。漕出と船子妹と背の。遠離るこそ是非もなき

○真葛が原の段  
我思の松を時雨の染難てと。慈鎮和尚が言葉の種。真葛が原の片邊り。風爐に常釜かけ床几。茶代一腹一錢が。店の風雅の拾所。丸山原り色酒の。酔を醒しよ來る客の。中に目まもんた京羽二重。見への作れと懐の。薄茶香居る茶釜。逆に立花桂庵迎。じより口の能廻る。判官

好みの辨慶醫者。四角べらしく茶碗差置。「イヤコレお由。今日の壽貞尼の何處へ趣かれたか「ハイお家様の大坂のお客で。正阿彌へ參られました」ム、風の神でい無て。正阿彌へ付込れたか「ホ、く又桂庵様の久しい口合。お前の又何方へお出たへ「イヤ下抽の八百八十軒の病家廻りを仕舞。餘り范と爲もへ。井筒で一世界。藝子共々盛潰され。阿輕女じや無が。酔さまし。風に吹れよ。罷來た。ソレハ兎もあれ。此店へ年の頃の三十一二。色黒で。でつくりと脊の低いお醫者が。下抽を尋ねぬの來なんだか「イヤ、エ其様をお方の見へませなんだ「ハテナアもふ來そふな物じやがチ、面前から來るがそふじやイヤコレ由坊、仁とチト内證の咄しも有バ。其方の暫らく勝手へ「アイ」合點で御座んす。用が有なら手を叩いて下さんせと。お由の勝手へ入にける「ハテサテ婿のあかね歩行様と。見やる向ふへ萩の祐仙それと見るより。「サ、イヤ」祐仙様。刻先より白鷺が火事見る様も。首長ふして待て居るも。去とての戀路に不情と。云ふ祐仙腰打かけ。イヤモ下抽も心の急されと據る無き朋友に出合。端の寮の書畫の會。それから快々堂で下らぬ薄茶一服。漸抜て只今。先何の扱置。兼て尊公に頼だ。秋月弓之助の娘。仲人爲と尊公の請合。仕拵料の三十兩。ソレ相渡とと出せば受取懐中し「ハア儘に落手。先方も承知あれど。爰に一つの難義と云い。先方の武家方もへ。醫者と聳に取ぬ様子。元月心と云ふ。出家が宮城阿曾次郎と云ふ男を。仲人せふと云入。大抵二親の注文よの逢やが。下抽の彼秋月へ立入する故。何卒阿曾次郎の人品國所を。聞合して吳との頼み。コレ尊公の戀の叶ふ前表。シタリ然る所彼阿曾次郎の。色白く厚鬚の當世男。尊公の物髪。此一條に下抽も色々心と碎き罷有てや「エ、それが何の心を碎く事ア、娘ゆへおら。元服のおるか。坊主に成ても苦しうさい。自他とも仲人頼み入「ム、夫から祇園邊の髮結







やら。人品の中に及んず。萬能は達せしとの義。それ故先客分に呼迎る約束致した。今日の吉日也。桂庵が彼阿曾次郎と同道する筈。女共お付掃除万端云付召れと。語る夫の言の葉も。操も心落付て「ソレハマア目出たい事それあらば。過日から夫との仰しやらいで。私一人が物業じ。女共や乳母に云付て。髪飾り小袖の色品。問談合も爲にやあらぬ。チ、それが肝心。身の圍めて薄茶一煎お身も。相伴爲れいと。夫婦打連入よけり。斯と白齒の娘氣に。焦る人をつくよ」と思ひ。頼し亂れ髪。過よし宇治の仇夢も。風も破し戀衣。深雪の居間を立出て。傍見廻し獨言「ホンニ任せぬ浮世世。邂逅逢た阿曾次郎様。心の丈を云置も。情ないの。國の迎ひ。周防と計行先の。當所知ねバ文さへも。言傳やらん便あく。是程焦る。心根を。直に云たい知せたい逢れる傳の無い事かと其ま。其所に打伏て聲も。得上す恐び泣。娘心ぞいぢらしき。始終伺ふ乳母淺香。納戸の口を立出て「コレヤ深雪様。一昨日宇治より戻つてから。何やら鬱々と思ひ有氣な顔持。幼稚時から育た私。何の遠慮も及ぶもの。明て云て下さりませ。と眞實見へし言の葉。深雪の涙押隠し「乳母とした事が何の其方に隔心が有ぞいのふ。實の螢狩よ。風と見初たアイヤふつと風に當つてたから。エ、モ辛氣でく成ぬ哩の「チ、その風を引しやんし」ので有。然も戀風と云ふ重ひ風を「ヤアそんなら其方知てやるか「チ、知いで何と爲ませうぞいの。楓に薄々聞た上。お前の居間も有た扇歌の唱歌の朝顔。手跡の宮城阿曾次郎殿。エ、サ何と違ひの御座んぞまいが。其阿曾次郎殿を戀焦れ。それ故の物業じと。私の疾から知て居ます。コレお案じ遊ばす。お前に語て悦ばす事が有ぞ。云ふ深雪の傍に寄り「チ、私悦ばす事といへ「サア外でも無い。今日お前に聲が響る筈。何と嬉しいかへ「ヤア私の聲といッリヤ。私や其様事聞度ふ無い。云出して

給るかと。背向素振つくく見て「ホ、譯も聞ずよそりや何事。出入の醫者桂庵殿の仲人で来る。聲がぬの宮城阿曾次郎殿と。聞て深雪の二度胸り「ヤア、阿曾次郎さんが被來といッリヤ實の事かいのふく「チ、何の私が虚云ませふ。が斯云内も心が急く「チ、それそれ夫から髪も結直し。小袖も相談サア、サア来て給て手を引立。悦び勇み納戸口。暖簾の内へ入にける。斯て其日も晝過て。隙行駒の夫ならで。岡崎の隠家と尋ねて爰も来る人の。肩から爪の立花桂庵。似た山笠の祐仙を。爰じやくと手招けバ鳥やの戸明て矮鶏どりの。米見付たる風情よて。バつぱくと鍋炭と。撒散しつゝ出來り。「ア、深雪殿のお坐敷の。最ふ爰へ。我や。耻かしいと鼻拭バ「エ、其様お初心を事でい持があかぬ。道々も云通り。宮城阿曾次郎を忘れまいぞと。云付置て門の口。頼みませうと案内の。手襷外さず飛で出て。納戸の内より下女のりん。應と云ふも不性なり「イヤ立花桂庵お見廻「エ、誰じやと思さら桂庵さん。胸り爲たがの「チ、道理く顔見たら猶胸りせふ。弓之助殿へ。下拙。宮城阿曾次郎殿を同道致したとサテ傳へられて被下ふと。云ふより心得て。其儘奥へ走行。下女が知せに弓之助の衣服改め提刀。操伴ひ一間を出「コレハ、桂庵老太儀く宮城氏を同道とや。早速に對面爲たし。不サ、是へと表へ出「萩の氏。アイヤ宮城氏。イサお通と。四角四面顔返事を何と祐仙が。今更何か敷居高く。うぢくもぢく入兼るを。無理引張連て入。顔を見より。操の憫て不審顔。様子有んと弓之助「チ、桂庵老。宮城氏の何所に御在るな「エ、則お目通りは扣へ居られ升「チ、ア、其仁が宮城阿曾次郎とや。「イヤカニモ、正眞取々ぬくく、の阿曾次郎殿ソレ宮城氏。御挨拶と。云バ祐仙扇とばちく「いかよも下拙が萩野へ、ソ、イヤ宮城阿曾次郎。此度の不思議の御縁で。御息女の聲に成下されふとの



事。其儘病家も打捨「ア、コレ」〜聲身始めての對面。餘り詞が多過る「ア、イヤ桂庵  
 苦しうあいシテ宮城氏に。娘深雪と知て居召るか「イヤモウ〜知た段じや御座らぬ。先  
 頃當所清水寺。地主権現の花盛り、病家が無さに見お行しが。薄雪擬のつとり者花の帽子  
 花の櫛、花の姿の。花やかさ。首筋元から慄として。見惚る中に早下向。下向せよとてお姿  
 を。目ふの詠めい爲ぬ物を。残り多さ見へ隠れ。此岡崎迄付て來て。親御の苗字お娘の名  
 透。聞合し程の心底男。聳入爲たら朝寐せず。水も汲たり飯も焚按摩肩引針の廢治。料物入す  
 仕。らうと。喋舌度々桂庵の。消も入べき術無さ。冷汗流す計。探の小腹立ちがら。弄  
 つて見んと打微笑「コレハ〜不束お娘を。それ程迄は御執心ならバ。如何もも組致そう  
 此方。講藝師範の家柄。詩歌俳諧香茶の湯。其御心懸が御座り升か「有共〜厭ひ彼「九  
 病五七の雨に四日照六つ入つ騒ぎいつも大風。「イヤヤそりや地震の歌じや御座りま  
 せぬう「いかにも〜自分の作。四か五か存せぬが。灰買よりの糠買が。遙か増つて賣口が  
 よふ。扱茶に於て。薄茶緑茶栗皮茶。利休茶こげ茶藍見る茶。此等が當世十人向。香よ於て  
 線香株香。沈香五種香。御望次第藥種店にて。随分利口に買廻し。手の物ごとを饒舌ける  
 ユミ「ヤア黙れ賣僧者め。コリヤヤイ己等武士を嘲弄に來たかと。刀退取叱付れば。祐仙桂庵  
 愉り敗聲「ア、滅僧者〜。全。左様者者ならず。間違なしの阿曾次郎「ヤア語さ。うつけ者  
 との見て取て。様子有んど。親我輩。ヤアヤア關助。此奴摘み出せよと。呼る聲にいつと  
 答へ走り出る。奴關助「ヤア〜種々の馬鹿者奴等。さう〜立て失在ふ。長居爲がバ打放  
 すと。刀の柄も手を懸れば。コリヤ堪ぬと祐仙桂庵。命苛々逃歸る。弓之助の苦笑ひ「ハ、ハ  
 、ハテ扱々世に。虚氣た奴も有バ有物。たゞけ無奴に係てはつと。退屈關助休みやれ。ド

レ一休みと立上れば。探も共お煙草盆。提て一問へ關助も。勝手へこそ入にけり。寐亂れ  
 の。鬢の短毛の梳ちがら。もつる、思ひく〜と。深雪が胸の亂れ髪。誰に云べき方もあ  
 く。涙に袖も濡縁の。朝顔の花打詠め「如何した事の縁やら。風と見初た阿曾次郎さま。御國  
 元から急用との。使の戀の障りの雲。晴間の星の邂逅も。今日逢る、と思ひの外。待焦れたる  
 甲斐もかく。可有も無い知ぬ人。やんに思へば無状。暫し別れの記念にと。書て貰ふ朝顔  
 の。歌の唱歌も我袖よ。涙だの露の乾問さ。歎き爲よとの歌占か。宇治の螢と成あらバ焦  
 れ出て夫の傍。飛で行さい顔見たいと。記念の扇身に添て。抱締〜忍び泣。日影待間の朝顔  
 の。雨お潤る、風情之。背後お立聞乳母淺香。それぞと察し立寄て「コレヤ深雪様桂庵殿の  
 鹿怒也へ。阿房らしい今の時宜。辛氣ない道理〜シタガお氣遣ひ遊ばすな。此淺香が與様  
 へお咄しヤ。阿曾次郎殿を屹度お前にお添しヤ升。くよ〜思ふて病氣や杯出ら。親御様へ  
 大きな不孝。氣を凛然と取直して。緑と月日を待が肝心。マア〜興へと諫められ。少しの心  
 晴懸し。袖の時雨の小止して。夕日照添。葛紅葉。顔赧らめて入にけり。折から表へ慌忙しく。  
 急に急て走來る武士。音のふ間も無くすつと入。弓之助殿〜弓之助殿御在宿かと。呼のつ  
 て。尻居に撞と倒る、息切。何事やらんと弓之助。追取刀に走り出。見れば覺への古朋輩。温  
 湯。汲とり用意の氣付。口に含ませ氣轉の活。ム、ト計お氣の付若者「ヤア弓之助殿「ホ、瓜  
 生主水が舍弟勇藏。慌忙しき体心得ず。子細の如何。様子何と。いつと勇藏氣を取直し「さ  
 れバハ國元に。お蘭の方の威光を借。成上りの蘆柄傳藏。御前よき儘下々へ過役を被。金銀  
 を貪りしより事起り。御領内の民百姓。一揆を起し我一と。袖が浦の城廓へ。押寄〜追取  
 悉。無二無三に責立る。去に因て御家の。騒動大方からず。早大亂に及ばん氣色。此騒動を鎮



めん者、弓之助より外にあり。主君の後悔頼みの御状。片時も早く歸國有て。賢慮を廻らしお  
 鎮めあれ。我の此儘國元へ。心も急バと云捨て。元來し道へ引返す。弓之助の大いに驚き。状  
 押開き讀下し。誠に殿の御自筆。先非を悔みし御頼の文体。ハ、ア勿躰あしく。主家の大亂  
 見捨ん様あし。ヤア、女房娘も歸國の用意。關助參れの詞の下。いつと答へて欠出る奴。か  
 旦那何の御用で御座り升。チ、火急お國元より御召の御狀到來せり。今日中よ家内を片付  
 今夜直様伏見迄發足せん。心得たるか。と云渡し與を投てぞ走入たり。俄の歸國よ周章混雜  
 氣もいらしくと關助が。何から爲と心の悶着。斯共知す阿曾次郎。歸國の暇餘所ながら。深雪  
 よ一日合の戸を。夫共流石。明難しが。思ひ切て竊と入。頼ませうと音あいは「エ、此忙しい  
 よ何者じや「イヤ宮城阿曾次郎とや者ど。半分聞す「ヤア又來たか。大馬鹿者と夕暮時。顔さ  
 へ見せに突出し。戸を立切し人違へ。様子知ねバ。阿曾次郎。不審ながら詮方をく。跡の歎き  
 の種どと知す。知れず別れ行

○明石船別れの段

和田海の。浪の面てる月影も。明石の浦の泊り船。風待種の徒然を。慰め兼て阿曾次郎。船先  
 に立出月影に。四方を見いらす氣晴ししの。田葉粉の煙り吹靡く。船路の旅を物淋し。傍に泊し  
 大船の。秋月弓之助が歸國の乗船。乗人も水主も船草臥。前後も知らす高野娘深雪の只一人。  
 目さへも合ぬ。戀人を思ひ焦れて鬱々と。戀ふ心と筑築琴。愁て慰むよすがらと。掻弾した  
 る糸調へ「露のひぬ間の。朝顔よ。照す日かけのつれあさに「チ合點行かぬ。ア、諷の過つる  
 宇治の笠狩に。秋月の娘深雪が扇に某が。書て與へし朝顔の唱歌。聲さへ深雪の生寫し。ハテ  
 不審さよと見上れば。彼方も見下すかさ立の。顔正しく「深雪殿でハ無か「ヤア阿曾次郎





様。逢たかつた。我を忘れて乗移ると。抱き取りて口に手を當て「聲が高い深雪殿。思ひも寄らぬ今の對面。何故又此所にさればいな。宇治でお別れやてより。モ片時忘す泣暮す内。國元くにもとに騒動越り。父母共ちちとちち俄の旅立。所詮逢ふ事叶ぬかど。何程悲ふ思ふよ。爰で逢た。盡つぎ縁。何卒此身を何國へも。連て退て給ひれど。いつたり抱き月の夜の。影も隔ぬ比翼鳥。放れがたなき風情。阿曾次郎も心を察し「ナ、嬉しい其方の。志忘れの置かぬ去りながら。其方を今連退て。某が武士道立す。殊に此度伯父の頼みにて。通ぬ主用猶以て。女を同道爲難たがひき入譯。有縁あらば添時節も有ふ。斯して居て人の咎め。サア疾と元の船へ乗て給も「エ、そりや聞へませぬ阿曾次郎様。添れる時節も有ふと。當座遁れの捨詞。お氣に入りの打明つやみて。包まず夫と云て給へ若もお前に添事の。ならぬ時に淵川へ。此身を投死なげし升る。再度外の夫迎へ。爲ぬを誓し身の潔白。然りと計水底へ。既に飛んと立上ると。慌て驚き抱き止「コレ待た早まるまい「イエ、放して殺して下さんせ「ア、是非もなし。夫程迄思ひ詰た娘心。見殺しにマ何爲られう。不義徒と世の人口。譏らば譏れ連て退。コレ尽未來迄女房ぞや「エ、嬉しう御坐んす忝ない。夫なら願ひを叶へて下さんすか「ナ、武士の詞に一言の無い。去ながら。此儘に連て退。親達の若や海川へも身と投たかど。お歎き有ん定の物。悉しい様子をつい一筆「ナ、能ふ語て下さんし。私も左様思ふて居ますが。何卒料紙を貸て下さんせ「ナ、心得しと。懐紙腰と探つて。南無三寶其方と抱留る拍子。海へ何やら落せし水音。旅草臥の寐入ねいれバ。竊と元船へ歸で。一筆書置爲て來ませう「ナ、夫宜らう。必ず物音させて親達の目が覺ぬよ。心得ましたと立上れば。阿曾次郎の肩車。彼方の船へ乗移と。音も目覺

す船頭共。「ナ、地嵐が吹出した。碇を上よ。帆を巻と騒ぎ出せば。あふ悲しやと。あせる内。船の次第に遠離る。コハ何と爲ん角と爲んと。あせるはづみは阿曾次郎が。船へ投込む扇の別れ跡白浪を隔の船。繫がぬ縁を是非もなき

○弓之助家舖の段

爰に藤州岸戸の家臣。秋月弓之助が一掃。性得風流文武は秀。人々勝れし武士の。都々塾居しみやま在けるが。國の乱れに召歸され。殿の仰を承り。事治りし其後の。昔に勝る歸り咲。いと美々うつく敷も榮へけり。家の接木の一人娘。深雪の思ふ其人に。邂逅逢し其甲斐も。浪の明石の別れわかり。國へ歸りし其日より。只ふらくと物思ひ。腰元婢女召連て。一間の内より立出れば。中に早技がまやまやり出「サ深雪様。此節の蕭々と。物思ひしいお顔持。サト外でも見て。お氣をお晴し成れませ「ナ、宜ふ言て給ふ去りながら。私か心の辛氣さ。月雪花の詠めも。勝る幾許の物思ひ。過し明石の浦浪の。恨めしい追風の風。島隠れ行戀人の。船おしぞ思ふ思ひと。誰に語ふを語ふぞ。よく結ぶの神よさへ。見放れたる愛身かど。心の内に口説くた安心ぞいぢらしき「ナ、何をくよくよ思召。親旦那様のお歸りに間も有まい。是から奥の離れ座敷で。楓を相手に琴の組でも遊ばしたら。お氣慰にも成ませう。サア、お出遊ばしませど。妙共に誘ひられ。心浮ねと蕭然と。是非も投首立て行。浩る折から玄關。先蘆柄傳藏様御入と。呼べる程も荒々しく。墨障りも無骨の蘆柄。肩で風切勿躰顔。横平らしく打通る。斯と聞てや主の妻。操の出迎ひ會釋して「コレハ傳藏様能こそ。先々彼方へと上座に付。おさめた顔に操の手を突「夫弓之助殿の。殿の御召みて登城の留主。夫故お出迎ひもませぬ。テ只今の何の御用と。尋ねに傳藏扇を鳴し「イヤ只今參る事別義で御座らぬ。當家の息女



深雪殿。いまだ定る聲がねも無よし。幸抽者も無妻なれば。殿へ内々。縁談の義を願ひし所。似合しき義と有て。お蘭の方を以て弓之助殿へ。其趣申渡されしに。有無の返答にも及ず。病氣と云立御殿を願ひ。國を立退れし故。縁談の義の其儘相成しが。此度歸參召れし故。度々仲人を以て。縁談の事を申入れ共。昨のこんにやくの時の明ぬ返答。夫故今日の。直々推參致た。御前迄願ひし縁談。意變有て。此傳藏が武士が相立すさぬ。否や應の一口商ひ。只今返答承らうと。權威を鼻にてつべい押。小面憎さも女氣よじつと堪へて「ホ、ハ、ハ、コレハマア見る影もない娘を御所望お預る。何程か御嬉しう存じ升れど。縁の事。親我意も成ませぬ。殊に夫も留主されば。只今とすての「イヤサ弓之助殿の留主にも爲よ。女の子の母次第。其元さい得心有て。御息女へお勤め有らば婿の明事。當時殿の御氣に入の。お蘭の方の拙者が姉。其弟たる身共を聲に取れなば。弓之助殿の肩身もいかるさ物と。半分聞ず「イヤサ傳藏様。身不肖に御座り升れど。娘の縁に連て。出世を望む様も。弓之助で御座りませぬ。其一言を弓之助承らば。假令娘が得心致しても。此縁組のお断とすの定。マ夫の兎もあれ。此頃娘の病氣も取合升れば。本腹の上夫とも談合致し。否やの御返事致しましよ「ヤア拔々と其手の喰ぬ。誠病氣か病氣で無か。此上の身が直々に改んと。衝と立ば操もせさ立「ヤア舌長あり傳藏殿。間狭あれども此屋輔の弓之助が。城廓なれば手柄は踏込でお改めあれ。女あがらも武士の妻お相手お成ませふと。云つゝ長押に掛る長刀と追取て鞘振外し。小脇に抱込身構に。さしもの蘆柄仰天し「ア、コレハ又短氣千万。改めて悪く。然云て濟事。達てとすでも御座らぬ譯。誠息女が病氣なら。随分お氣と付召れ。縁談の義の又追て。始め義勢引替て。挨拶さへも碌々よ。先懸られし目無基の。片手打れし如くめて。すどくとして

立歸る。斯て時刻も押移り。常に變つて欣々と。立歸る秋月弓之助と。操の手と突へ「コレハ只今お下りか。毎お無いお隙取。御前の首尾の如何で御座り升と。尋ねに機嫌の打莞爾「イヤモ悦び召れ。お上の首尾の極上々。此度國元の一揆を相鎮めし事。殿にハ一層。御賞美有て。先地の上に二百石の御加増「イヤモ殊の外の御機嫌にて御悦びの盃迄下された。然るに大内家の家臣。駒澤次郎左衛門と云ふ武士。使者お來つて共に相伴。盃の取やりの時。熟々見る。人品骨格天晴の若者。しかも文武兩度の達人なれば。殿も甚御賞美有て。汝が娘の聲も致せよとの御意。かの駒澤も承知の体もへ。諸士の手前面目是に過ず。御前に於て。堅の盃迄取替しすた。娘もハ過分の聲汝も安堵仕召れと。云に操ハ「ソナラ殿様の御仲人にて「サ、サ大名のお仲人にて聲を取娘の大仕合せ者。聲の顔と見在たら。嘸悦び在と。父の悦び母親は。娘の心測り兼。案じる胸も然ぞとは。明て語れぬ此場の思ひ「イヤサ我夫。殿様のお仲人どやながら。娘にも得と云聞した上で云約束の成らいで。餘り性急で御座りませぬか「イヤサ某も其氣の付ぬでハ無れ共。御前の仰と云。日本一の上々聲。拳を以て大地を打外す共。娘の氣も入の定の者。安堵して娘も云聞せ召れ。ヤレハ餘り悦ばしさを。思はず酒を過し。餘程酩酊。ドレ暫時一休みと。刀を提て機嫌顔。居間を投てぞ入にけり。跡お操の兎や角と。娘の心計り兼千々の思案も尊告る。柱時計の音さへも胸も動悸物案じ。差俯向て居りしが煙管相手の獨言「今の夫の詞で。御上の御意に被つた縁組。娘思ひの我夫が。見極めての云約束。鹿相の有う様ハ無れど。只案じるハ娘の事。先頃宇治の螢待に。見初た宮城阿曾次郎殿と。娘共が噂。立花桂庵の仲人で連て來たハ賣主者。何卒元の阿曾次郎殿の行衛を尋ね。娘も添して遣たいと思へとも。肝心の所と知す。右か左かと思ふ矢先。差懸つゝ縁結



び。一旦夫が御前まで。お受やた上からい。今更何共變換あらず。此上の娘に譯を云聞せ。得必さすが上分別左様じや〜と。打點首娘々と呼聲に「アイと返事の爲あがらも。晴ぬ思ふくよ〜と。打簫然たる娘の深雪。奥より立出傍お寄。母様何の御用と。伺へば母の莞爾「チャ。今日の髪飾りも。尤う能出来ました。思ひあしか氣合も好そうぞ。ママ嬉しいシタガ娘や。今呼だの外の事でも無い背丈延た其方。何年月迄も。一人置の病氣の基。夫故其方又好聲と。呼迎る分別と。半分聞ず「ム、アノ私にかへ「チャイのふ「イエ〜私やチト様子有て。殿御持事の否で御座んす「チ、左様云るの。宮城阿曾次郎殿へ心底が立ぬと思やるか「エ、「サス語バ拘り爲やらふが。先頃宇治の盛符。お宮城阿曾次郎殿と。云約束を爲やつた噂の。娘共よ海々と聞及べど。云出すの今日が始め。何卒其阿曾次郎殿に。添し度どの思へども。肝心の國所の知ず。何所を証據に尋ふ様もあし。然るも。今日弓之助殿登城の折から。大内家より御使者。駒澤治郎左衛門と云ふ人。器量骨柄揃ひし天晴の武士と。殿様よの殊の外御賞美あり。秋月弓之助が娘お見合し。跡目相續爲よとの御意。夫も好聲と氣に入。御受やて聲鼻の。盃迄取替して歸られ。娘に得と云聞し。得心させよとの殿様のお仲人と云。娘思ひの爺御の氣よ叶ふた聲がね。様子と云の此事じや哩のふ。「エ、夫なら殿様のお仲人でハアいつと計りに心の當惑。何と返事を詮方も。涙差合計り〜。「チ、顔と知ねの案じやるも無理ならねと。智選みの夫。何の其方の氣よ入ぬ様も聲を取れふ。殊よお上の御意の被つた晴の縁組。今更變が地悪の蘆柄傳藏が来て。是非聲に成ふとの押付業。嚇しを見せて歸した。お蘭の方へ云込で。又何様な難題を。云懸ふも知ぬ。邪魔の入ぬ内。縁組の取極が肝心。淺香共談合して今宵

中よ返事しや。可愛い其方に何の悪い事働ふぞ。只何事も親々に委して。忍ぶ返事を待て居るぞや。ドレ其間よ我夫と。祝言の相談せふと。詞を尽し母親の。奥の一聞へ入にけり。跡見送つて娘氣よ。堪々し溜涙。わつと計りよ過度さも。母お知せず聞せじと。袖隠しめて忍び替に。絶入計り。歎さしガ。漸々顔を上。「エ、聞へませぬ母様。常々のお諭しよ。貞女兩夫お見ずとの。教へと守れと。仰しやつた其お詞ばよ引變て。阿曾次郎さんと私が譯。知て居るがら二人の夫。持よとい。嗣徳を。如何した縁か知ね共。思ひ初た阿曾次郎様。思ひ絶ふと思ふ程。彌増思ひ身の因果。生てなま中愛事と。見んより筆を身を投て。死で未來で添々樂しみ。勿体ないの父上母様。先立不孝の免して給べ。又二つふの乳母淺香。此年月の養育の。思も送らす死るの。浮世の義理と締めて。堪忍して給れやと。云も黒白あき袖の雨。泣々硯取出して飽よ別を摩る墨も。涙よ薄き親と子が。歎きの種を巻紙に。書置鹿の命毛も。頼て切行敢果あさに。筆の歩みも頼りれて。敢果取り兼る書置の文。涙あからふ書留め。封じる際も跡先に。心奥より聲高くと。御寮人様深雪様と。尋る乳母の淺香の聲。見答られじと文さし置。庭へ新りしも夕暮の。無常を告る鐘の。六つ四つ五つ飛鳥。かわい〜の聲々も。身に染渡る秋の風。戰栗膝節踏めて。心も足も飛石傳ひ。裏道さし足落て行。斯とも知ず乳母淺香。手燈携へ立出て。深雪様〜。深雪様の何所にと云つ〜見廻す料紙の傍。落たる文を取上て。何心なく見て胸り。コリヤ深雪様の書置。奥様や旦那様と。呼る聲に弓之助。標も俱に走出れい。淺香の披けし文差出し。コレヤ深雪様が身を投るとの此書置と。半分聞ず「ヤア〜書置と氣遣ひあ。と云つ〜操り文かつとり。何々。みづらら事。宮城阿曾次郎殿と云かわし〜へば。二度の夫をひり〜てい貞女の道立がたく。不孝ながら淵川へ身を投ら〜と。



讀間もせき立弓之助。南無三寶死したり。併手弱き女の足。遠く得も落延じ。關助の何所に居る。早くくと走來る奴。お旦那何の御用で御坐り升。コリヤ。娘深雪が身を投んとて。忍び出し。若黨下部に手分して。跡と追蒐取留よ。エ、コリヤ大變。斯云内も氣遣ひ。も泣れず。俯向操乳母淺香。弓之助も氣の顛倒。腰元下女若黨仲間。呼立々家内中。上へ下へと返しける。

○大磯揚屋の段

「すけんぞめきでじく鳥が。ひれつゝ來つゝ。格子先。叩く水鶏の口もめ鳥が。チ、ちつとも。さへつるまゝとのつる霞。風ふ聲々浮立て。たそや行燈の影光る。戀と情の中の町。分て榮る。松葉やの。坐敷の絹で拭磨き。目を驚す計なり。此家の亭主仁左衛門。袴引上走り出。「ヤレ。忙しや。女子共のまた粧仕廻ぬかい。エ、便々と婿の明ぬ。今日の助大盡の御趣。向で。廊中の色達を。物揚にして大踊りとの御注文コリア女共。花も生直さし。爐の炭も添で。置。コリヤ。遣手共。料理場の拵へ。宜か。問へ。ヤイ男共。藝者衆促お性よ。皆宜か。辛勞。人を使ふのも大抵の事。無いと。疊かけたる八百萬。髪。點首計。天窓振立。饒舌ける。岩代多喜太。奥より立出。「ナント亭主踊の拵へ。諸事萬端。手筈の宜か。大方殿の。成に間も有まい。藝者太鼓と大門口迄迎ひ。遣やれ。ハイ。そこ。如才の御坐りませぬ。モツ疾。御迎ひ。遣のしました。願て。お出で御坐りませぬ。ドレ。私の勝手へ。参り。御肴の指圖仕て置やせふと。肩から爪の長廊下。送りちらして。走り行。引違へて。赤星運八。薙かましく。入來り。コレ。ハ。岩代氏。萬事御苦勞。存じ升。チ。運八殿。今日の御役目御苦勞。」

テ。放擲之助の。また參られませぬか。「サレハ。大門口の茶店で。彼傾城瀬川と。いちや。くちや。餘り婿が。明ませぬから。身共の先へ。參りました。チ。夫こそ。究竟。其元。に。談を。る。子細あれど。爰の。端近萬事。の。奥にて。左様。と。打點首。奥の。一間へ。入おけり。誰も。知まい。二人。が。中。の。筆と。硯が。知計り。夥多の。藝者。圍まれて。大内之助。義興の。色と。酒と。に。乱れ足。千鳥が。崎の。屋鋪より。今日も。廊の色。通ひ。現余念も。あり振も。夫と。多喜太の。立出で。コレ。ハ。ま。り。我君。明暮。ア。掛物の。繪の。如く。引付て。御坐り。あ。が。ら。大門口の。お。契り。の。餘り。御念。が。入。過。ました。と。云に。義興。莞爾と。笑ひ。「エ。不粹な。事。語。さ。それ。の。格別。聞。ハ。國元。から。來。新。參。の。田舎者。身。よ。目。見。へ。願。ふ。由。兼。て。の。趣向。の。通り。場。敗。を。さ。すが。一。興。ナ。用意。が。宜。ハ。踊。を。始め。い。ハ。ア。畏。り。奉。る。併。一。家。中。の。内。より。抽。で。來。る。程。の。駒。澤。若。御。諫。言。サ。時。の。ア。又。ま。て。も。諫。め。と。此。仙。境。へ。通。ひ。初。て。の。釋。迦。如。來。が。五。百。羅。漢。連。て。來。て。異。見。し。て。も。毛。も。無。い。事。サ。所。を。諫。る。臨。機。應。變。ア。諄。い。命。の。懸。替。が。二。三十。有。り。知。ぬ。事。慮。外。サ。バ。コ。リ。ヤ。五。郎。正。宗。ハ。ア。天。晴。大。丈。夫。其。お。心。を。見。る。上。の。太。夫。ど。の。始。め。拙。者。め。迄。安。堵。仕。り。ま。し。た。イ。ヤ。コ。リ。ヤ。岩。代。行。燈。より。燭。臺。を。赫。と。點。させ。踊。を。始。め。駒。澤。め。を。呼。出。せ。ハ。ア。委。細。承。知。奉。る。ソ。レ。女。子。共。早。く。踊。を。始。め。させ。い。ヤ。面。白。澤。を。呼。出。し。召。れ。と。云。に。心。得。花。車。中。居。酒。宴。の。設。け。と。り。に。既。踊。を。始。め。ける。ヤ。面。白。の。四季。の。詠。や。春。の。上。野。の。花。盛。り。雲。よ。か。げ。ら。ふ。兩。國。の。涼。の。花。火。星。下。り。秋。の。賑。ふ。御。殿。山。山。王。堤。に。降。積。る。雪。の。景色。も。面。白。や。音。頭。を。囃。子。三。味。太。鼓。手。振。揃。へ。の。花。笠。や。翳。姿。の。花。紅。葉。お。召。よ。依。て。阿。曾。次。郎。今。の。駒。澤。次。郎。左。衛。門。と。名。も。改。る。囃。小。袖。鈍。守。億。せ。ず。入。來。れ。ハ。兼。て。差。圖。を。受。た。る。踊。子。右。よ。左。り。と。障。も。る。と。宿。障。ら。ず。通。を。夫。と。尻。日。お。岩。代。多。喜。太。駒。



讀間もせき立弓之助。南無三寶死したり。併手弱き女の足。遠く得も落延じ。關助の何所に居る。早くくと走來る奴。お旦那何の御用で御坐り升。コリヤ。娘深雪が身を投んとて忍び出しど。若黨下部に手分して。跡と追蒐取留よ。エ、コリヤ大變。斯云内も氣遣ひあ。朋輩共へい淺香殿。云付召れ。下郎の直よと尻引からげ。性急に關助かけり行。俄の騒動泣にも泣れず。俯向操乳母淺香。弓之助も氣の顛倒。腰元下女若黨仲間。呼立々家内中。上へ下へと返しける。

○大磯揚屋の段

「すけんぞめさでひく鳥が。ひれつゝ來つゝ。格子先。叩く水鶏の口あめ鳥が。チ、ちつともさへつるまいとのなる霞。諷ふ聲々浮立て。たそや行燈の影光る。戀と情の中の町。分て榮る秘葉やの。坐敷の絹で拭磨き。目を驚す計なり。此家の亭主仁左衛門。袴引上走り出。「ヤレ。忙しや。女子共のまた粧仕廻ぬかい。エ、便々と埒の明ぬ。今日助大盡の御趣向で。廊中の色達を。物場にして大踊りとの御注文コリア女共。花も生直さし。爐の炭も添で置。コリヤ。遣手共。料理場の拵への宜かと問へ。ヤイ男共。藝者衆促お性よ。皆宜か。辛勞。人を使ふのも大抵の事での無いと。疊かけたる八百萬。髪の手筈へ。點首計。天窓振立饒舌ける。岩代多喜太奥より立出「ナント亭主踊の拵へ諸事萬端。手筈の宜か。大方殿の成に間も有まい。藝者太鼓と大門口迄迎ひよ遣やれ。ハイ。そこお如才の御坐りませぬ。モウ疾よ御迎ひよ遣ひよ遣ひました。願てお出で御坐りませぬ。ドレ私ハ勝手へ参り。御着の指圖仕て置やせんと。肩から爪の長廊下。近りちらして走り行。引違へて赤星運八。薙かましく入來り。「コレハ。岩代氏。萬事御苦勞よ存じ升。チ、運八殿。今日の御役目御苦勞。」

チ放埒之助のまた参られませぬか「サレハ。大門口の茶店で。彼傾城瀬川と。いぢや。くらや。餘り埒が明ませぬから。身共の先へ参りました。チ、夫こそ究竟。竟ナト其元にチ談をる子細あれど。爰の端近萬事の奥にて「左様」と打點首。奥の一間へ入おけり。誰も知まい二人が中の。筆と硯が知計り。夥多の藝者又圍まれて大内之助義興の。色と酒とに乱れ足。千鳥が崎の屋舖より。今日も廊の色通ひ。現余念もあり振も。夫と多喜太の立出て「コレハ。エ、我君。明暮アノ掛物の繪の如く。引付て御坐りあがら。大門口のお契り。餘り御念が入過ましたと。云に義興莞爾と笑ひ「エ、不粹な事語さ。それ格別。聞ハ國元から來の新参の田舎者。身よ目見へを願ふ由。兼ての趣向の通り。踊最中へ呼出し。場取をさすが一興。ナ、用意が宜ハ踊を始めい。ハ、ア、畏り奉。併一家中の内より。袖で、來る程の駒澤。若御諫言サ時の。「ア、又々ても諫め」と。此仙境へ通ひ初て。釋迦如來が五百羅漢連て來て異見しても。毛も無い事。サ所を諫る臨機應變「ア、誨い。命の懸替が三十有ハ知ぬ事。慮外サ。コリヤ五郎正宗「ハ、ア、天晴大丈夫。其お心を見る上。太夫どの始め。拙者め迄安堵仕りました「イヤコリヤ岩代。行燈より燭臺を赫と點させ。踊を始め。駒澤めを呼出せ「ハ、ア委細承知奉。ル。ソレ女子共。早く踊を始めさせい。家來衆の駒澤を呼出し召れと。云に心得花車中居。酒宴の設けとり。既に踊を始めける「ヤア面白の四季の詠や。春の上野の花盛り。雲よかけらる兩國の。涼の花火星下り。秋の賑ふ御殿山。山王堤に降積る。雪の景色も面白や。音頭を囃子三味太鼓。手振揃への花笠や。翳姿の花紅葉。お召よ依て阿曾次郎。今ハ駒澤次郎左衛門と名も。改る囃小袖。鈍す億せず入來れ。兼て差圖を受たる踊子。右よ左りと障ゆると。宿す障らす避通と。夫と尻目お岩代多喜太。駒







らした云ひ様。兼てお前の此里へ忍びくみ通のしやんして。多くの女郎衆に。詩文の指南  
 助様への沙汰あしに。私も拙い文章の。添削受し此様か。初て今日のお目見へ。知ぬ顔の爲て  
 居れど。日頃短氣をアノ殿様。萬一荒氣の出まいかと。心の内で幾瀬の案じ。然其物馴たお前  
 もへ。酒振やら舞の手で。夫の。酷いお氣にいら様。是からの何日迎も。お傍放れずお顔見  
 せて下さんせ「コレハ」御深切忝い。イヤモ万事不骨の田舎者お引廻しと頼み入。がそれ  
 の格別。イヤ何瀬川殿。其方の眞實殿様を。大切に思ふ氣か。若又外より根引爲ふと有べ。其  
 方へ行心か。所存の程が聞たい。と様子有げお詞との。思へど故とそらさぬ顔「チ、駒澤様と  
 した事が。私が氣を知つて居て。種々の探り言。殿様と私との。初對面の其日から。水も波さ  
 ぬ二人が中。醫死でも中々あ。變る心の御坐んせぬ哩な「ホ、ヤ適貞女。其頼もしい心底を  
 見込。頼入度子細あり。何と頼まれて下さるまいの。「コレハ又改つたお詞。數あらぬ私を  
 れど。身に叶ふ事あらバアノ頼まれて下さるじや迄「チ諄。然してお頼みと「ホ、頼と  
 云の外ならずと。衝と立て床の間の花生の櫻拔取て瀬川が前に差出し。コレ此花の車返し。  
 櫻の數も多き中取分人の賞衛するの。色香の妙成計でなし。散さば清き花の本。性。譬て云バ  
 其方の姿。又。アレアノ床の掛物の。定て聞も及びつらん。唐土の玄宗皇帝。御寵愛の陽貴妃  
 と。沉香亭お引籠り締てからんで横笛の音お聞へし二人が中。天有有べ。比翼の鳥。地有有  
 べ連理の枝と。契り合たる陸言も。果の馬鬼が愛別れ。先其の如く此花も。千世も連理の榮へ  
 をと。思ふよ甲斐も嵐と云ふ。妨に合時の。枝に別れの落花微塵。ア可惜花を散そふより。  
 枝を分つて日影お生られ。仇に吹くる嵐と。避る思案が。有そふお物「ム、そんなら連理の  
 榮へを捨て「ホ、手折とも人あとかめそ櫻花けふ計とぞ盛りをも見め「サ得くりと思案し

て車返しの其花を。散すか咲すか二つ一つ。色よい返事を待て居ると。花に心を擬へ歌。詞殘  
 して駒澤の。一間へこそい入あけり。瀬川の跡を見送つて。暫し詞も無りしが花打詠め獨り  
 言「心ありげな花の譬。アノ掛物も擬へて。散さぬ様との詞の端。手折とも人な咎めを櫻花  
 と。古歌を引し。ハテ何かと計よて。散來る花の雪よりも。解ぬ思に打傾。思案に暮し  
 折からみ。禿枝折が走り來て。「ヤ、太夫様助様が先刻から待兼て御座んす。早座敷へ來  
 なんせいな。「チ、嘸待て居さんせふ。ドレ往やんしよと搔立ど。濟ぬ胸の愛思ひ。心摸  
 稜の手と引れ。奥の座敷へ入あけり。様子立聞岩代多喜太。一間を出れば此方よも。窺ひ出る  
 赤星運入。「岩代様「シイ聲高し運入。新參の駒澤奴。必定諫言と思ひの外。踊狂ふて俱に放  
 埒。合點行すと物蔭より窺ひ聞バ兼て。此大磯へ入込。瀬川共馴染の様子。二人打寄じやら  
 り。くらり。花の譬の何やら氣ふさい。彌不義に極らば。此方の爲より幸究竟。放埒之助も毒  
 と吹込。只一討渠奴と寂滅。「ム、成程。趣向の段。通妙計が若其手で行ぬ時。「チ  
 、其時のコリヤ斯う。と耳に口「ム、スリヤ松が枝より。油斷を見渡しどつと。コ  
 リヤ必ず振る。合點と。叫び點首密々。悪事に念を入智恵も。同じ穴成狐武士。心奥の間  
 奥庭へ。立別てぞ忍び行。一雙の臂の千人の枕と。賦せし詞の花に寝る大内之助の熱酔の。胡  
 蝶の夢や現なき。傍り瀬川の。人知ぬ。心に思案有磯海。深き思ひお搔暮て。寝られぬ儘に傍へ  
 ある。視引寄細々と。書取筆の歩みさへ。強かちぬ文の男文字。より。に引變て。浮世の義理  
 にあらまる。思ひの紙や知ぬらん。枝折くも忍び聲。アイと返事も長廊下「いいらん何で  
 御座りんすと。廊の詠も可愛らし「ア、コレ大さお聲爲やんあ。云つ、傍に氣を配り。何か  
 秘密叫けバ。點首吞込氣轉者。袖に隠して走り行。望月の。影お引てふ夫ならで。闇を便の駒



澤の道の枝折を先立。瀬川に忍び逢坂の關の角戸を挿明て。差足拔足忍ひ来る。夫と見  
 るより正体なき。殿の寐息を窺ふ瀬川。竊と立退。駒澤に。呷き渡す返事の文。何時の間か岩  
 代が。一間の内は窺ふ共。二人のいさや。白紙の封押切て口の内。讀ぬ容子と岩代多喜太「ヤ  
 イ不義者見付た動ちと。云つ、一間を欠出れば。二人の恠り。大内之助不義者待と列起て。刀  
 直利と瀬川が肩先。ばらりすと切下られ。アツト計り又倒る、深手。見向もやらす短慮の  
 義興。駒澤覺期と切蒐ると。飛退つて身を平伏「此次郎左衛門。毛頭不義の覺ひのす。唯一言  
 や上度さ一義あり。先々くく暫くお待下されよ」ヤア云々駒澤。先刻より空寐入して窺  
 へば予が目を抜て文の取遣不義でないとい安外千万。「チ、サ此岩代が見る共知らず。やて  
 ころしい不義密通。御手討の刀の穢れ縛り上げて逆。ヤアく者共。ソレ駒澤奴を搦捕  
 要つと兼てより。木蔭は忍の取手の面々。十手打振欠来り。腕を廻せと韓めいたり。毫も騒  
 がず。じろりと見やり「ヤア仰々しい科人呼り。成へ手柄は擲て見よ。と云つ、袴絞り上。  
 待間もあらせす双方より。小脇に組付腕のらみ。さしつたりと振解き。右と左へ頭顛倒續い  
 て蒐る二番手が。打込十手搔潜り。やぐれを付込瀧落し。庭へ散乱三番手。大勢一同は打込  
 を。四天拂ひ拂ひ退。秘術を盡す働らさよ。取控れてさしもの捕手。たじろく透を人。破落  
 離く遙に投退。ム、覺ちさ身を理不盡の成敗。科極まらぬ其内。滅多は細の被りやさ  
 ぬと。云せも果す岩代多喜太「ヤア語たり大盗人。不義の証據は是爰よと。落散一通差出せ  
 ば。追取上て義興公開さ。見れ共下らぬ漢文。コハく如何にと惘れ果。暫し詞もあかりけ  
 り。手負の苦しき息を吻。「ソウ恥しや。假も文の取遣せしを不義徒との疑ひ。更々無  
 理と思ひねど勿体ないお前を差置。仇し心と持よふな。此瀬川での御坐りませぬ。コレ得

くりと氣を鎮めて其文讀で疑ひを。晴して給と云聲も。深手も弱る。息つかひ岩代の冷笑ひ。  
 「ハハ、工んたり拵へたり。陳奮漢の隠し詞。角字で紛らす手も有事。ヤアくお傍付の儒  
 者淺井順藏。此文體讀上被よ。サ早くくと呼ひる聲。ハツト答へて一間より。立出る淺井順  
 藏。件の文を取て逐一に讀下し。「ム、スリア是「唐士の揚貴妃が。馬鬼が原よて。玄宗帝お別  
 れたる最斯の故事を綴し文章。不義の詞の曾て無しと。聞て驚く大内之助「ム、シテ其子細  
 の何とく「ハアイヤ恐れながら其譯の。駒澤めが仕らんと。鈍る色あく座に直り。某伯父  
 の頼も依て。國元へ下りし所。養父了庵我を招き。主君義興公。鎌倉にて御身持甚だ放埒。御  
 諫言者。誰彼分ず即座は御手討。是皆。國家と望む佞人の爲と業。先達て藥王樹をかたり  
 取れ。剩さへ靈府の尊像紛失。等閑ならぬ御家の大事。汝我名跡を受繼。鎌倉へ立越。如何よ  
 もして我君お御諫言を率り。御本心お成し參らせよと。吳々の頼みもへ。ハ、ア委細心得ひ  
 と。夜を日に繼いで。當地へ參着仕れ共。佞人讒者の妨にて。御目通りも相叶はず。夫故忍ん  
 で廊へ立入。詩文の流行。ヤ是幸と添削ふ事よせ。瀬川殿に對面し。心底と試し。先刻。床の間  
 の掛物と。車返しの櫻を以て。歌に擬へ無體の戀慕。心の命を所望の謎。夫と悟つて禿を  
 引。忍ぶ此身の。ハ、ア勿体や。假にも主君の思ひ人に。不義と見せしも國家の爲め。逢は  
 其儘差殺し。返す刀に切腹と。思ふ違ふ此文章。其身を捨し。揚貴妃が馬鬼が原よて。最期  
 の心。君の興を本國へ。車返し。國家の納り。ヤモ驚き入る。秀作名文遊女。に稀成心の。探。  
 君のお爲。故と御手に懸りし。譜代の臣が戰場の。御馬先の討死より。遙は増る健氣を覺  
 期。ホ、出かされたりと感賞の。水と流せる辨説の。實類ひなき忠臣あり。聞て手負の起直り  
 「ア、嬉しや本望や。サ殿様。疑ひ晴して。未來の夫婦と只一言。語て聞して下さんせと。合す







仕て在らぬ。呆痴臭い。其類けたとど大段平と。扱ば此方も扱合し立向ひしが月影も閃光及  
 の尖どさに。互ふ脚跡退り。「ヤ、ノ、ノ、マア待マアまで。我ど此身が爰で切合たら。孰が死  
 るか知ね共。跡は残つた噂や坊主奴が。今日戻るか。翌日戻るか。待やうけは成居で有ら  
 何と互ふ様子と書置して其上で。勝負せうかい。「チ、コリヤよう気が付く。併し汝や紙や筆  
 が有かい「無てかい」。紙も矢立も爰に有哩。が待よ。始を何と書た物で有ふ「ハテ知た事  
 變一つと書やい」ア、何云とい。夫での受取の様を哩。夫なら待よ甲乙と。一筆示しりり。  
 イヤそれでい姫の状見た様かと云で有ふ。チット有そく。一筆啓上仕りい「エ、夫での年  
 頭状のようを哩」そんなら待よ。チ、思ひ出した。先書置の事。ム、成程善の。其次のエ、我  
 等事。此度商賈の人買出入に付。切合て死す。是迄人の物を盗みいへ。到底地獄へか  
 まりやす可くい。何卒佛の手下に成れる様。問吊ひ頼入す。死る此身の構はずいへ共。跡々  
 の飯米の事。氣は懸りす。南無阿彌陀佛。何と哀れみ。能出來さでい無かと。云ふに勘  
 太が涙含み「ア、能く出來たが成程汝が云ふ通り。死だ跡での噂や娘が。目して泣くと  
 思や。我や」。いぢらしふ成つて來たと。聞て權七泣出し「チ我が母の。涙を引して間の  
 無いに。此書置を見をつたら又しやりに。出ふや成ぬかと。泣くで何と思へば我や命が惜ふ成  
 つて來た「チ、我も死度ない」我も。双方がはうづき程の荒涙。潜然エ、いらく。く  
 しやくり上し正眞の。鬼の目からの涙あり。「ナント勘太よ。我や何とも死度ない。何卒助  
 かり度い物じやが。チ、有々。ム、有々の「サレバヤイ汝と中直りさへ爲りや。死いでも大  
 事無いじやまいかい」チ、實に左様じや哩。そんなら最ふ中善と成て。此邊を最一遍尋ふか  
 「チ、どうじや」。此様を能い智慧が。初手から出ら。書置して泣くまい物。下司の智

恵の跡先。氣を賦れよと。うろく。眼。風は騒げる。磯際。の。あし。は。任せて。兩人。の。左右。へ。こそ  
 の尋ね行く。山鳥の。初尾の。鏡影。ふれて。見ぬ戀人。と。一筋。は。焦れ。く。て。身。お。積。る。深雪。屋敷  
 を。忍び。出。で。心。急。げ。と。行。難。み。石。よ。爪。突。打。倒。れ。暫。し。の。起。も。得。さ。り。し。が。漸。く。に。起。上。り。「ア、  
 嬉しや今の悪者の油断の間。是迄逃て來たれども。生存命ての恥の恥。連も此身の無き者  
 と死る覺悟のしきからも。心懸りの母様の。絆を分ての御意見を聞分ぬのみならず。死る私  
 が不孝の罪。逆様ながら一遍の。御廻向頼み。上。升。る。又。二。つ。お。の。乳。母。淺。香。嘸。や。夢。も。現。も。も  
 尋迷ふて歎くで有る。死る此身の厭ねど。跡の歎きを見る様も。免して給と詫涙。又戀しい  
 阿曾次郎様此世の縁の薄く共。未來の添て下さんせと。道があどなき娘氣に。親を思ひ夫と  
 乞ひ。わつと泣音。小夜千鳥。いと哀を添よける風に音する古木の柳。信と見上て打黙。  
 涙ががら抱へ帯。結ぶ甲斐無き悪縁と。恨あがら疾々も。枝に打掛死覺期。南無阿彌陀佛  
 の聲諸共。既に斯よと見へたる折から戻り懸りし以前の老女の。夫と見る。馳寄て「コレ待  
 た待えやんせと抱留られて。深雪の悲しく「イエ」放して殺えてと。あせると猶も抱留め  
 見れば若い女中の徒跣足。男故の欠落じやの。夫なれば替の花と散そふより。命さへ有あら  
 ば。戀しい人は逢れまい物でも無と。なぐむる詞に涙ながら「チ、能ふ語て下さんした去な  
 がら。屋敷を扱て出ながら。ふがない女の身。所詮添れぬ縁あれば。何卒死して下さりませ  
 と。又立上ると楚と抱留「ソリヤ悪い了簡。コウ私が留る上。此方の慕戀人を。尋索て逢  
 て進せふと。云ふ嬉しく「エ、そんなら戀しいお人を。尋て逢して下さんすか。エ、嬉し  
 う御座んす忝いと。死る覺期も今更。色は引る。戀慕の間。心迷ふと道理なる。浩る所へ  
 前の悪者。尋ね戻てうそく。さよら。香取眼。深雪の顔差覗き「ヤア爰に居るか一遍



捜さしむつた。此方へ來ふと手を取ら。老女の突退深雪と圍ひ「コリア此女中を何と爲るの  
 じや、女中此方へと手を取て。行を押留立塞り「何所へ」。其幻妻の。我等の網に罹つた鳥の  
 脇目振開よ逃さらした。此方へ送せと掴み付。二人が腕首ぐつと締。はづみを打て投付られ。  
 悔り爲乍ら我武者もの起上て立籠る。勘太が頬へひつゑやりと。當る小判の一包「アイマ  
 ーと苛ひ目よ合老やがつた」と云つ、取上。ヤアコリヤ金と云ふに權七手を取て「ム、コリ  
 ヤ小判で十兩計。エ、負て置と分口し。元來し道へ立歸る。老女の跡を打見やり「テモ悪者共  
 シタガ十兩よの安い物。エ、イヤサ此間よ早ふと手を引て。袂より出す呼子の笛。ふつと一  
 息吹鳴せ。相圖と見へて元船より。苦押上て架たる歩み。深雪を伴ひ乗移れ。直に歩みを  
 手取早く。破引上りやいを解權追取て沖中へ。半段計漕出す。折から砂道韋駄天走。宙を飛て  
 せさに關助。斯と見るより聲を被「チ、イ、其船待た待やいと。呼と叫べど聞ぬ振。窓より  
 差出す深雪が顔「ヤア娘様か「關助かと云んと。爲すを引戻し。障子びつしやり跡白浪陸あ  
 りあせる關助の。後へ抜と權七勘太。折角罹つた好い鳥の。手強い婆奴に上られる。熱て儂が  
 わんぢふと引剝で腹いせせ。取て驚るを引外し。イヤ面倒かと抜打に。眞向梨割拜討。倒る、  
 死體に目も留す。心の矢狂磯傳ひ。跡を尾ふて追て行く

○摩耶が嶽の段

雲巖巖と棚引し。摩耶が嶽として津の國と。播磨も跨がる。高山あり。峰高うして雲に沖り。谷  
 深うし眞落に通ず。苔滑かある岨道の。巖の壁に削るが如く。常に馴るる山賤も。足踏迷ふ岨  
 祖あり。斯在深山の。懐も。自然ある岩窟も。何日か住家と爲し初て。住馴したる岩壘。岩の屏  
 風も遣からむ。葛の紅葉の宛然も。藟なしたる如くよて。しほらしくも又物凄し。此家の

荒妙の。老の手業の手もだもく。賤が積芋も鬢の白髪に。紛ふ雪の朔精山茶谷折持て。娘千  
 里の立歸り「ヤ母様。今日の籍様の祥月命日じやと云老やんした故。谷陰で折て來コレ此  
 花御前様へ備て下さんせと。云に老女の打點「サ、それ能ふ氣が付た。我が挿ふより其  
 方の手向ダ。佛へ御馳走。佛檀へ立つて來じや「アイ、合點で御座んす。シマガヤ母様。ア  
 ノマア浮洲のまだ戻らぬかいさチ、皆のものに夜山に往たがまだ戻りからぬ「エ、テモ遅  
 いことである。山雪で冷るで有らふ早ふ戻りの爲やらいで、其方の何で。浮洲の遅い  
 を案じるぞと。答められて氣轉の笑ひ「ホ、アノマア母様と云た事が色々の詞答召遣ひ  
 の人じや物。チットハ案じも仕升ふかいさ。夫のそらと。先日連て戻らまやんした女中の。  
 何所へ行老やんした「エ、娘と云た事が。様々の根問葉問。其女中の此間。播州邊の能い衆  
 の所へ。奉公に遣たのじや哩の「夫のマア最愛い事。人も通ぬ此山中遣ふ物とて。荒さま  
 しい男計。折々の若い女子が來るけれど。何時の間やら皆奉公。分て此間の女中の媚も心  
 も老はらしそふな人好い咄し連と思ふたに。是も又奉公とや。夫あらそふと。暇乞でも爲て  
 往たが宜いに。聞へぬ人やと恨言。女同士とて老はらしさ。老女の聞もうるさげに「エ、係  
 も構ぬ他人の事。諄々と云すと。早ふ花を手向て來やと。苦い顔付氣の毒と。千里の花を  
 携へて。佛間を投て入よけり。折しも雪道踏分て。立歸つたる三人連。縛り上たる里の子に。  
 泣音を留る猿轡。或の衣類旅荷物。銘々荷擔げて内に入「ヤア頭精が出升の「チ皆戻つたか。  
 ナト獵が聞たかど云。に我先猿送り。繩からみ投出し「イヤモ昨日からの大雪で。人通りの  
 殆無く。漸と向の村から來るる奴。ヤ此奴好い仕事と。稻村かけからチ、イ、と呼たら。  
 サア慄ひ出しくさる。トたと思ひ引捕へたら。八十位の老耄め。引剝ぶ布子下着帯の小倉の



花色鳥。へ、まんさらでも無と。自慢らし氣を投出す。次の山蛭洞八が。十二三の小女郎を  
 突出し我が張場も人通りが無て。鬼やら此娘一疋。豆腐買ふ来たのを。引捕へて顔見れば。  
 小しやらしい頬付もへ引かたけて戻つたと。話れば老女の苦笑ひ「エ、母の明ぬ摘み銭。シ  
 タガコリヤ浮洲。われが仕事に如何じやいや「イヤモ新米の此浮洲。何卒頭の氣も入様を  
 好い仕事と思へども。扱大雪で好い鳥も罹らす。漸山伏奴を引剥た。兜巾襪懸珠數輪袈裟。  
 夫から夜更で長崎飛脚の迹足早ふ迹をるを。追かけて引奪つた。荷物の内は人參が十四五兩  
 珊瑚樹が十二三。金が一步で十五兩。跡のござく。からくた物。帳合を頼み升と。一々様に  
 並ぶれば。老女の夫々帳あ付「チ、出来た。エ、猿こりも山蛭も。嗜めく。新米の浮洲  
 に花と取れるの。心懸が悪いからじや。シタガ仕事の間物マア。酒でも香で。晝の内は休め  
 く「チット合點じや「マアコリヤ又聲が高い哩。常のらも云通り。氣の叶ぬ娘もへ追剥  
 の人買の。と聞たら虫が出るに寄て。獵師商賣と云て有程に。汝等も随分知さぬ様。其小娘  
 も。例の鳥やへ投込で置「チット合點。夜通しは顔の上つて。陰囊を。猪糞炊焚。熱間でも。情  
 も知らぬ牛頭馬頭等。泣入小娘引立て。勝手へこそ入あけり。岩が根の雪より忠義に凝た  
 る關助。深雲が行衛爰彼所。尋ね呻吟思はず。此岩囀に尋來て。斯と見内入り「卒爾なが  
 ら此家の内へ。年の頃い十五六で屋敷方の娘は。若吟ふて見へませさんだかど。云よ老女  
 の心の合絞。扱ひ由緒の者成かど。思へど態と然有ぬ道「イエく其様。女中の見受ませぬ  
 ガ夫を何もへ尋ねさつしやる。然ば。拙者の蕪州福岡の者。子細有て主人の息女。若氣の  
 至りる屋敷と出。其又翌日小瀬川で。警と見た船の内。呼と叫べど届かぬ追風。ものいくれ  
 に見失ひ。夫より。陸を方々と尋るに。此麓の里人あ問されば。エ、丁度其格好の娘を。六十

有餘の老女が連て此山中へ登しとの事故を尋ず。シテ此家外の家でも御座るか否「チ、  
 有共く。アノ坂を左りへ取。十四五丁行ハ獵師の家が有。其所へ行て尋さつしやれ「コレ  
 ハ近頃。恭い。氣せきよ御座れば最早お暇と。欺る工みも白雪の。道踏分て尋ね行始終小盛  
 お窺ふ手下。指足してコレ「お頭。今の奴が口振の。何やら先途の仕事を「チ眼付おつ。様子  
 併家の無い山中へ遣たれば。迷戻つて来るの定。足が付ての面倒。コリヤ汝等追付て谷へ  
 ぱつたり。チ、春込だと猿こり山蛭諸共關助が。足跡尾ひ追て行。引違て入来る武士門口に  
 立留り「荒妙殿在宿かと云つ。入れば老女の不審「ム、遂見馴ぬお侍様。何方からの御越  
 か何の鬼もあれ「マアく是へと。請すれば。會釋も無く上座へ通り「イヤ身共ハ蕪州傳藏  
 迎。山岡玄番殿に一味の者。則玄番が密事の使者委細の義の書面よ。と取出し渡せば老女の  
 受取「テ、是のマアく遠方の所殊難所の山坂を。御苦勞様やと。云つ。手紙取出し封押  
 切て口の内何か心に打黙さ。ハ、そんならお前も玄番様と「チ、サ疾より合体。身共ハ蕪州  
 岸戸家の家中。兼て玄番殿と心を合し謀反の密談。然るに。駒澤了庵が養子次郎左衛門と云  
 奴。鎌倉表へ参り放埒の大内之助を本心お立歸せし猿智恵。此奴如何成術を以て。藥王樹を  
 奪返さんと討るまじさ。お非ず万事お心と賦られよとの傳言「チ、成程。此密書も其事實  
 も油断の致しませぬと。憚りながら山岡様へ「チ、サ心得やた。が身共ハ外お所用も有ハ最  
 早暇やと夫の餘りお開しい。何ハ無共御酒一献「ア、イヤく又重ねてと立上り。出る  
 を見送る互の目禮。老女の一問へ蘆柄も。二足三足立出しが。何思ひけん小戻りし。内を窺  
 ひ小黙と奥庭投て忍び行

○摩耶が嶽の段

三段目の切



冬ざれば。人目も草も枯果て。残るも淋しき軒の松。枝吹あらず雪嵐。いと寒氣を増りけ  
 る納戸を出る浮洲の仁三。寒さ凌ぎと圍爐の傍。櫓打入て御垣守。衛士に有ぬ焚火より。  
 戀のへ燃る胸の火の晝も消ざる物思ひ。娘千里の母親に。心奥より忍び出「ナ、仁三郎何時  
 戻りやつゝ。夕べの酷い大雪で内へ居てさへ寐若し。モウ私や其方の事と。案じて計り居  
 た哩かと。詞をまやゝ寄添バ。色を合し雪の梅山の奥さへ浮世なれ「ナ、サ千里様。夫の能  
 ふ案じて下さり升たのふ。が此方へ来て新米の此私をまあつてらしう。云て下さり升ので。  
 蔭さぐら悦んで居升哩。併し夜持ぐ愛の商賣。雨降晩や雪の夜で無ければ。コレ好い鳥の  
 罹りませぬぞへ。ムアノ夜菱でも鳥を取のかや一エ、お前も。素人の娘か何ぞの様に。コレ  
 鳥と云の。ナハヤ、イヤ矢張取じや。ハ、ハ、何が其鳥めが。雨や雪が降と聲山立て之を呼  
 でも。イヤサ人を見てもよふ。働かぬので。アモ取よいと云事と。聞て千里の打蕭然「如何に  
 世渡る。つゝ池。寐鳥と取の甚い罪。最ふ是から其様事。止て欲いと入譯と。白齒娘の  
 氣も弱く。耳を押へて差俯向「ハ、ハ、ハ、氣の弱い。何ぞ其様に否がらまやつても寐鳥の愚  
 猪狼より恐ろしい事を爲る。コレ登様を取ねバ成ぬぞへ。マア些嗜。だが宜御座り升と。  
 云顔じつと打詠め。エ、否やらしい。其様事聞度ふ無い。私が好の殿御と云の。ナコレ仁  
 三郎。日外母様が連れて戻らしやんした女中様。アノ子を頼んで文の數。返事の無いの夫りや  
 聞へぬ。モ今更云も耻かしけれど。人里遠さ此内へ初て來やつた其時から。最愛らしうて。  
 凛として。明尊思ひ増鏡。紅白粉も何卒して。其方の心に可愛と思われ度さの化粧水。何と  
 云寄る詞さへ。難の鹽漬下然。焦れ暮して海士衣。涙に筆の濡文も。戀のいろはの手習よ。  
 油に付てふ任吉の。神の御座の合す手も。嬉しい逢瀬と求塚。生田の森の幾度か。運ぶ心を少

とでも。汲で呉たが宜い哩かと。男の膝も取付て。赤らむ顔の夕日照摩耶紅梅の色盛り花も  
 耻らふ風情「イヤサ見る影もさい者を。度々の心遣ひ。嬉しいけれど。お前の主まり我の  
 家來。如何は商賣柄じや迎主の娘を盗む。イヤサ主の娘御と忍び逢も否物と。有樹の遠慮し  
 て居ました。が眞實思ふて下さるなら。如何にも如何成と爲ませふ。コレお前に無心が有  
 が何と聞て下り才か「アノ。私ダ願ひさへ叶へて給るなら。モ何様事でも聞哩のふ「ム、そ  
 んならアノかみ様が大事よ爲て居やえやる。女の病を治す守。竊と見せて下さり升ぬか。マ  
 、夫の安い事あれど。アノお守の。二重箱お入て。錠を鎖し。錠の母様が肌身放さず持て居  
 やえやんすれバ。首尾を見合せ見せる程に。アノ鳥渡奥の間へ「ハチ然じやと云て晝中に。  
 エ、マアコレ鳥渡來やいのと。無理も手と取笹栗の。我から落て草の露。濡に行身ずわりを  
 けれ。折から坂道息喘喘と昇て輪抜吉兵衛。遠慮會釋も荒くれ物。雪踏散し門口より。婆様  
 内よか鳥渡逢ふと。叫けバ納戸を立出る。老女の傍見廻して。夫と見るより落付顔。ナ、誰  
 かと思へバ輪抜殿。大きな聲で何事ぞ「イヤ何事でも無い。此中百両で直と極て。預つて去  
 だ代呂物。さだめても偽かしても。只潜々と這る計。勤奉公の否じやと意地張。間が透る  
 赤逃支度。イヤモ顔に似合ぬ強情女郎じや哩の。入込の内に。取逃しての此方の大損。事の  
 無い内代呂物戻すと。小腕取て引出すの。世も秋月が娘の深雪。泣腫したる目の内に溜る玉  
 の緒も。絶す重る愛思ひ。其儘庭に泣居たる「エ、又まてもく。云事聞ぬはいた女郎。コレ  
 吉兵衛殿。折檻して又相談せう。替りあひ不足あれども夕べ手まへ。小女郎め。行口が有あ  
 ら頼升と。庭の小屋より以前の小娘細付の。儘荒氣なく。引立出て見せければ。輪抜熱々打  
 眺め。よ、年の往ねとまん。でも無い代呂物。相談の跡にして預つて去ましよと。駕へ



投入先立。泣入深雪を白眼付。ひた骨折した駄女郎と。誰々立歸る。跡も老女が笑ひ聲「  
 何所へ遣ても投戻される。執拗子やの。小瀬川で身を投ふと爲て。死る命と助けた上大々  
 い拾兩と云金迄入。今日迄養ふた義理を忘れ。奉公否がる恩知らずめ。賤しう育ぬ奴と思  
 ひ。手寛ふ爲に付上る。アノ愛も。糟賣女奴が己。アコリヤ最ふ徐々と。痛い療治を爲にやな  
 らぬ哩の。焼返つたる圍爐裏の鐵橋。片手に握つて目先へ突付。サア艾不用の。一つ灸。其  
 美しくしい顔へ燃ふか。サアツレハ「頬がまぢを突抜ふか」アコレヤ何卒御堪忍「サアそれ程  
 お悲しく丸山へ賣れて行と。云れて深雪の涙聲。「ナ丸山とやらに聞及ぶ。唐土船の淺  
 どやら情無や唐國の、人に肌身を汚さる。君傾城の愛勤。是計りの御了簡。「アム、そんな  
 ら日向へ奉公よ」ア、コレヤ日向とい。夫よりの。遙か遠き日の本の。果と聞ハ猶悲しい。何  
 卒都へ只の奉公。水仕の勤も厭ひ仕ませぬ。お情お慈悲と計りあて。只手を合せ泣居たる  
 「ホ、、エ、味い事云汝じや哩のふ。水仕お遣てい。コレ金に成ぬ哩の。コレくく好  
 い子じや程ふ。アノ恩返まじやと思ふてナコレ此婆々に設さして下されいの「サアそれい」  
 但し此鐵橋が喰たいか「ア、コレヤ」否か「何のく。何の否とヤし升ふく」。「サア賣  
 れて行か「サ、それい」サアくく否なら殺すが如何じやい「ムア、」サア返答爲い女  
 郎めと。罵る聲の囁付如く。肝お應へて此世から。擦落に沈む愛思ひ悲し。剛と恐ろし。さ。  
 涙の胸に陸奥の。安達原の黒塚に。籠れる鬼の呵責にも増る責苦に絶兼て逃行袴引戻し。  
 邪見の老の皺腕に。引ずり廻し責折檻。見兼て千里の走り出「エ、コレ母様餘りじやく  
 く餘りじや哩の。いとしやあげ此女中を。情らしう助けたの。イヤ命の親と言まやんま  
 ても。君傾城に賣ふとい。能ふ胴慾よ言れた事。賣で成ぬ事なれば代お私を賣て給と。廻り

留るを振放し「コレ娘エ、其方の知た事じや無い。其方へ退て居や」ア、イヤく何卒  
 ふでも此子の賣さぬ。私をくくと。争ふを「エ、面倒など突退けて。手弱き深雪を打々々  
 焼鐵橋の續打。アット一聲反返り。其儘庭に倒れ伏「ノウ最愛やと泣入千里。老女も今更詮  
 方も憫れ果さる折こそ有。麓の方より手下の眼太。息を切て欠來り。「イヤコレくお頭大  
 名の金飛脚此麓で追取卷。あぶお仕事と仲間の者汗水流共手強い奴。何やら此方が覺束無  
 い早ふ加勢と言捨て飛か如く引返を。聞より老女の恠り仰天。浮洲の居ぬかと云内も老  
 の焦立傍ある。心に覺の一腰挿込。裾バせ折て馳出るを「ノウ情なやと留る娘。引退く  
 足。麓を投て走り行。跡も娘の狼狽と。彼方此方を氣遣ふ内一間を出る浮洲の仁三。千里の  
 見るより「ナ、好い所へ仁三郎様。何やら事が起つた連母様の今麓へ。ガマア差當つて此女  
 中を何卒助ける仕様の無いか」アサア何と云て外も何も。ナ、ソレく幸ひ頭の留主  
 の間。今の守を。サアくはやと「アイく合點も女房顔。千里の納戸へ走り行。浮洲の深  
 雪を拘拘へ胸撫下せば手に障る。守り袋の中改め「ム、藝州岸戸の家中。秋月弓之助が娘深  
 雪「ム、と心に一思案。手早も納る程もなく。娘の守の箱携へいそくとして。立出るサア  
 く「兎やら斯やら取て來た。母様の戻らまやんせぬ其中に。早ふくと手お渡せば。箱追取  
 て敵々敷深雪が頼に押當れ。守の奇特忽お。息吹返し邊りを眺め「ヤアお前の娘御「ナ、  
 氣が付たかへ。ア、嬉しやくコレ幸ひ母様の留守なれば此間に早ふ行まやんせと。聞て  
 深雪の飛立計嬉し涙に暮居たる「コレく女中此坂を左りへ取の。御影へ出る近道。頭が戻  
 らぬ其内に。サアちやつとくと手に合せ。添ふ御座んする。死でも御恩の忘れじと。膝  
 も戰慄立兼て。漸進れ路て行。浮洲の守に目も放さず何思ひけん有合鐵橋取より早く守







に云付拘引。君傾城に賣渡せし。其罪科が報ひく。て。姫君の御身の仇と成たるの皆妾が作せし業。赦して給と取付て。悔歎けバ菊姫のいどい涙も哽かへり。ソウ自迎も仇も爲る身の徒。其方の最期も自故堪へて給もと討めて。歎けバ老女の猶せき上「チ、よふ云て下さつた翌をも知らぬ老の身の。死る元より覺期のまへ。夫に引かへ姫君の戀焦れたる其人に。一日片時添しも爲せ。盛りの花を無慙く」と。無常の風お散とかと。主従手お手を取交し。わつと計りに嘔返れば心を察し春次も。不便と見やる兩眼またバしる。涙はらく。降積雪も一時は解て流れて谷川の。水も溜作す如く。斯る歎きも白雪の。道を蹴立て欠來る關助。庭先へ踊り入「ヤア我を欺き山路迷ひせ。討んど謀り狸婆々天罰報めて自滅たう。深雪様を拘引。何所へ遣ふ。サア眞直に白狀爲。何とく」と詰寄バ。三郎聲かけ「先待れよ。我こそ駒澤了庵が二男三郎春次。疾より此家へ入込で。始終の子細の皆聞た御邊が尋る深雪と云の。我兄次郎左衛門と。兼て縁邊の契約有事某兼て聞及ふ最前守りも書付有て。秋月が娘どの察したる故。此家の千里と云合せ。都を投て落せしと。聞て關助小踊し「ハ、有難しく。お禮の重ねて。心もせけバ早お暇と。欠行向へ蘆柄傳藏飛で出「ヤア聞た。浮洲の仁三と云の大内家の浪人。此通り山岡殿へ注進と逸足出して欠行を。エ、いと打たる小柄の手裏剣。たじろく所を關助付入。抜手も見せず空竹割。ホ、潔しく。山岡玄番が逆意の企。得方夫と知され共。紛失爲たる靈符尊像。奪返す迄荒立雖し。此密書を媒鳥にして。玄番を亡す我術。必堅固で關助と。勇立たる其有様。手負の老女の聲と上「チ、適々。が只痛のしき。菊姫様。最期に婆々が一つの願ひ。此世の縁の薄く其未來を結ぶ夫婦の盃聞届て下され春次様。ホ切成老女が願ひ任せ。盡未來迄替らぬ夫婦。半座を分て待れ

よと。詞は嬉しく二人の手負。手と合したる悦び涙。ホ、其媒の此關助と。心を汲取かいげ。極。是や末期の水盃。冥途の旅へ嫁入の。儀式を做ふ三々九度。苦しみ中も莞爾と。笑顔の婆の色直し。雪の白髪。の尉からで。姥も敢なく介添の。彌陀の淨土へ犬張子。血汐の紅も染て。道野邊の送り火消果し。草葉の露の玉の興。哀れ果敢なき契りなり

○濱松の段

思ふ事。儘あらぬこそ浮世とい。誰古への託言。今我身の上に降る。涙の雨の晴間なく。哀れや深雪の數々の。憂苦重りて目界さへ泣潰したる盲目の。力と頼む物連の。縋ひ細き竹の杖。有に甲斐なき玉の緒の。切も果ざる三味の糸。露命を繋ぐよすがと。背にわいかけ蕭然と。心の闇路たどり來る。跡に大勢里童。各手お竹切振廻し「アレ」朝顔の乞食目失。叩けく。打く。取廻す「ア、コレ」日の見へぬ者。其様に。爲ぬ物じや哩な。誰もア次郎坊「チ、然じや」。仇穢い乞食の物。貰ふ物かい。其様事を語たら。コリヤ斯じやと惚々。竹で打やら石打やら。育も下主のわんぱく共。集て蒐つてさいまされ。「ア、コレ」モウ再び云や仕ませぬ。堪へて下され誤つたと。土お平伏詫けれバ「チ、泣て誤るなら堪忍して遣。サア皆來い。例もの土手で芝居ごと。五郎よ次郎よと呼連て。道草爲ながら走り行跡は深雪の目つと泣。エ。淺ましや情あや。誰有ふ岸戸の家老。秋月弓之助が娘共云れし身が如何に落ぶれたればとて筋目も無い里の子に。乞食よ非人と打叩かれ。誤り升たの何事と。身を抱締て倒と伏。説涙ぞいちらしき。穴尊と導き玉へ觀音寺。遠き國より遙々と乳人。淺香の淺からぬ。歎きも身にぞ笈摺の。深雪の行衛尋んと。思ひ立たる願願も。辛苦愛身の憂



れ笠の会りも服兼て。杖を力に歩み寄「コレ」女中。即時ながらサトお尋ねや度いと音のふ聲よ泣顔隠し「ナ、コレハマア誰様かへ存じませぬが。私ハ目界の見ぬ者。ガア、何事のお尋ねと。云物ごしの裾はづれ。何やら尋る其人よ。似たと思へど形容。是非人殊又盲目。心の迷ひと思ひ返し。ホ、ハ、ナ、私ど忘れた事が鹿相。目界の見ぬお人に。問ふ事ハ異物あれど。若し此街道を。年の頃の十六七。媚容人ハ勝れ屋敷育の大振袖。供をも連す只一人。通られし様子をバ。若し聞ハ成れぬかと。云に正しく我身の上と。胸騒ぎしが待暫し世の中。お似た聲の人似た事の無きに有すと。思ひ返し「ナ、夫ハマア笑止事や。往來も繁き此街道。女中の一人旅は。幾人と云限りなし。左様に尋成れてハ。中々知ふ様もなし。ガマア國ハ何所名の何と申升へ「サレハ、國ハ越州福岡。名ハ深雪様と云ふハ。彌乳母淺香ヤレもつかしやと。云度も。落ぶれ果し今の身を。我と名乗るも面伏。殊に夫と云あらハ。連て歸なれて父母ハ。何の顔下て見ゆべき。罪深き事ながら。偽り騙して歸さんと。猶しも聲を晦して「ナ、成程。儘か其様な噂も聞たれど。其女中の國を出しより。様々の愛目ハ逢。漸遣れ此邊迄は來られしが如何した事か四五日前ハ。淵川へ身を投て死しやんしたと人の噂。假令何様に尋ても。最ふ逢ふ事成ますまいと。聞て淺香ハ「ヤア」何其女中の身を投て。ハアはつと計ハ身を打伏。前後正體泣居たる。深雪も共に悲しさの涙包して傍に寄「コレ」女中様。悲しいは道理ながら。老少不定の世の習ハ。定りごとハ。歸て早ふ國へ歸りや。跡吊ふてお上げささるが佛の爲。海山懸し長の旅。随分怪我のさいやうにと。云つ、立て掛小屋へ。りくして入相の。鐘に哀を添ふける。跡に淺香ハ茫然と涙ながらの一人言「エ、コレ」聞へさせぬぞへ深雪様。家出さされし其時。一言明して下。なら。仕様様有ハ。ハ、ハ、

最愛や奥様の。お前様の事を苦ハ病て明ても暮ても泣て計。果ハ重き病ハの床。死る今端の際迄も。何卒尋て連歸り。慙て位牌に無事顔。合して吳よと私への遺言。夫故忠の明をも待す國々廻る順禮も。お前ハ逢ふ計りじやに。何故死んでは下さんした。私しやお位牌へ云譯を。何と爲ふぞと身を悶へ。恨る人の目の前に。有共知ぬ御言泣。聞ハ深雪は身も世も有せず。袖を噛しめ耳を押へ。泣聲立じと喰切り。堪へくし苦しきは。骨も碎る計りよて。泣よりも猶辛かりし。亂るハ心押鎮め。淺香ハ涙の顔を。ア、我ながら愚痴の至り何時迄云ても返らぬ事。此上の菩提の爲。打殘たる札所を廻り。早ふ國へ歸りませう。然じやくと立上り。小屋の戸口に走寄て「イヤ」女中様。甚いお世話で御坐り升た。モウお然ハと夕月に。別れを告て行過しが。何か心小點頭て木蔭ハ忍び鏡ハ共知ぬ目盲の悲しさに。思ハす小屋を轉び出。乳母の行衛ハ彼方ぞと見へぬながら。延上り「コレ」淺香。今云ふたハ偽り。尋ぬる深雪ハ私じや哩の。聲を聞ハ其時は。飛立やうに有され共。淺ましき。此形でドウマア顔が合されふと云ながら私ハ身を。能々大事と思へばこそ。海山越て憂苦勞。廻り合ハ逢ながら。胸欲にも余所く。云て去した心の内。マ、何様ハ有ふぞいの。只何事も是迄の。約束ごとハ締てコレ堪忍して給も。や。取分て悲しいハ。是程不孝ハ此私を。矢張子じやと思し召。身の。徒を苦ハ病で。お果成れた母様の。死目ハ合ぬのみならず。御命日ハへ露知老。儂い事が有るかいのふ。思へハ。淺ましや。親々の罪計でも。目ハ潰れいで何とせふ。赦して給へと計にて。堪へくし溜涙。わつと叶びて身と投伏。前後正體泣沈む。立聞淺香も忍び兼。わつと一聲泣出せば。扱ハ其所と深雪ハ驚き。輾つ轉びつ遊行と。籠り留て聲震ハし「コレ」マア、待て下さんせのふ。姿形ハ變つても一目にも。見違ねども。名告



かけても中々あ。明さぬ氣質と知た故。餘所事云おして。木蔭に隠れて始終の様子。立聞爲  
 とも盡せぬ縁。去ながら。此年月骨身を碎き。漸尋逢た物。心強ふ去とふとらりや。嗣欲  
 じやく。聞へませぬいなアエ、其恨の断りながら。今も今迎云通り。身の徒で此様  
 あ。落ぶれ果。體形何マアそれと名乗られふ。私グ心の悲しさを。思ひ遣て必ず。呵つて給も  
 るお誤つと。絶り歎けバ「チ、何のマア呵りませう。假令何様もお成なされても。廻り合た  
 が私や嬉しいとい云物の。是の又。余りを落ぶれ様。日頃の幸苦が思ひ遣れて。私や。く。此  
 胸が裂る様。御座り升座のふ。シタカコレお氣遣をされ升座。私グ達の親古部三郎兵衛と云  
 人。小夜の中山の途に。存命で居さんすとの事。肌身放さぬ守り刀。それを誰か廻り逢。阿  
 曾次郎様の有家を尋ね。屹とお逢せや升よ。が何を云ても爰の街道。宿方へ急がんと。泣入  
 深雪を勞りて。立上る折。夜道はかく。輪坂吉兵衛。よい事だなと蚤取眼。二人が素振  
 物臭しと。傍へ立寄提灯の。火影に深雪が顔打眺め「ヨウ汝や先日摩耶の婆々に。百雨で直を  
 極た娘。いつの間は亂てかくれぬ。成とつとぞい。然し醫者は悪たら。治らぬ事も有やい。  
 何分元手いらすの勝負物。ドレ拾ふて遣と手を取を。淺香は引退氣色を變へ「ヤア女と思ひ  
 慮外仕やると。許しお爲と杖退取。仕込し刀抜かくる。其手と押へて「ム、ハ、ハ、ハ、ハ、是  
 や、い。輪坂吉兵衛と云てな。日本國を股掛る人買商賣。輕小刀ひねくり廻しても。微懼共  
 する男じや無い。襦袢袴の下つた亂れ爲より。賣れて絹の衣着いと。調弄詞聞兼て「推參お  
 勾引。見事實なら賣て見やと。抜放して切込刀。さまつらりと身を躲し。最早百年目と輪坂も  
 。同じく旅差抜放し。觀念せよと切結ぶ。深雪のあせれど盲目の。何と詮方並木原。二人の打  
 合ふ月明り。爰をせんと。團合ふ如何の爲けん輪坂が。石は躓さ眞逆様。轉ぶを得たりと起

こも立す。肩背も分らぬ滅多切。さし物悪者七轉八倒。のさ打廻つて。死たるの。心地よくこ  
 を見へにけり。淺香の楚と留めの刀。サア、く。嬉しや深雪様。悪者の刺止ましたと云内より  
 も心の弛。其儘其所お倒れ伏。深雪の恐々撈寄り。勞る手先もまた血「ヤア、く。其方  
 も手疵負やつたか。喃悲やと抱かへ。淺香の喃くと。聲と限りは呼生れ。息吹返し目と  
 開き「チ、深雪様。お身に怪我の無りしか「イヤ、く。私何とも爲ぬが。其方の手疵が氣遣ひ  
 ち。氣を慥に持てたも。取付歎けバ「ア、コレ聲が高ひ。私のほんのかすり手。氣遣ふ事の  
 御座りませぬ。が萬一の事が有た時の。最前やた古部三郎兵衛と云人。此守りを證據又廻  
 り合。今宵の譯をお咄し有て何角の事とお頼みわれ必お忘れ遊ばすナヤ。誰も見ぬ間お出と  
 刀。と納め。深雪が背に。負する涙古三味の。何にか昔時にかへら尾。最どもつる。心を。心  
 轉じ變ても手疵の痛み。盲目あらぬ。我身さへ。杖と力に立上り。女心も張詰し。弓張月の夜  
 半の鐘。つくす忠誠の一筋。伴ひてこそ急ぎ行

○宿屋の段口

行雲の。足並早雲助が。持ぎ際を東海道。傳馬人足歩荷物。取付む煙草さへ。五十三次。  
 打續く。中お賑ふ島田の宿。所名うての内證よし。名さへ我や徳右衛門。仕似せる廣く十間間  
 口。店の講礼講印。かけ渡したる暖簾も。風に閃めき吹付ける繁昌類ひ無りける。逗留客の裁の  
 祐仙。一間の内より歩み出「コレ、く。女中衆。些尋たいた事が有。ヤ外の事でも無いが。奥の客  
 人。中國大内家の御用人方で在る。ッレかれバ裁の祐仙で御座る。ちよとお目お懸りたい。  
 とすて呉やれ「ハイ、く。呼まして上升ふと。お鍋の立て入あけり。斯とえらせよ。岩代多喜太  
 一間より立出れバ「コレ、ハ、く。岩代様。先以て御堅勝で「チ、誰かと思へバ裁の祐仙。久々對



面。身共お逢ふいと如何成事「サレハ」先達ての御状にて。新參の駒澤が諫言にて。殿  
 太義。身共迎も何かに付て。邪魔お成駒澤め。何とぞ密に害せんと。昨日海道にて笹久藏  
 と云浪人を連歸り。委細の密事や合。奥の間の下やへ忍ばせ置た「ヤそれの好い手筈。もし其  
 手でいかぬ時の。下拙が手製の。コ、コレ此藥と。薄茶に交て飲す時の。忽ち五体痺て死人  
 も同前。刺殺すに手間隙いらす。又此丸藥の。則解藥これと。先へ吞置。少しも酔ざる大妙  
 藥。か時に申さぬ言の聞へませぬが。首尾よふ參れば。御褒美と。ハ、夥多と戴き度ふ存じ升  
 「サ、出かす」。先これの當座の褒美と差出せば。押戴き「コレハ」忝い。何のい後程  
 ナ、万事ぬかりの無い様と。云つゝ立て岩代。元の座敷へ入よける。跡に駒澤が御状の味いぞ  
 當座の褒美が先拾兩。さらば是から湯の仕かけと。云つゝ傍見廻して。件の藥と湯の中  
 へ。竊と投込蓋びつまやり。斯して置て駒澤が。戻り次第お振立て。我等が先へ腹加減。解藥  
 の丸子でまゝらまゝ。駒澤めい忽ちぐまや。お鍋「サ」奥のお客がお呼あさる。早うと急立る。聲お怖り祐仙の。素知ぬ顔で奥へ入  
 る。始終窺ひ徳右衛門をろく出て跡打詠め。最前か様子と聞けば。何やら怪しいアノ藥  
 駒澤様へ「ヤ上ふか。イヤ」夫で却て當り際り。何卒よい思案が有らう物じやナ、ソレ  
 ヨ昨日松原で買て置た笑ひ藥。アノ鐵瓶の湯を換て。ナ、然じや」と。手早に懐中の。藥を  
 ふり込蓋を閉。斯して置て正可の時の。チットよし」と。心で點き徳右衛門。勝手へこそ入  
 入にけり。斯在折から立歸る。駒澤次郎左衛門。足音ソツト岩代多喜太。祐仙伴ひ出迎ひ「コ  
 レハ」駒澤氏。嘸御疲れ。先々是へ。イヤ何祐仙。其方の平生茶好。定て茶箱も用意しつら

んソレ。駒澤殿へ一服立て進ませせ。と云ふ祐仙空とばけ「コレハ」岩代様。私風情の能  
 茶を。御所望との冥加ない。殊に彼方様の「ナ、サ是が則駒澤氏。殿御歸國の先駒。宿々の欠  
 引よて。只今御歸宿。御遠慮深いお人。され共元來。茶の道に御執心。用意の薄茶。サ、所望  
 だ」ハ、コレハ。中々彼方様へ上り様な。茶での御座りませぬと。御所望との身の面  
 目。苦しからずい何服成と。召上られ下されふと。遂従たら。立上り。茶箱取出し毒藥の工  
 みの裏流か。れし共。まらぬ手前の。まかつべらしく。振立て差出せば。岩代多喜太詞と改め  
 イサ駒澤氏と取次所へ「ヤ先々暫くと徳右衛門。恐ながらと坐敷へ出。憚ながら旦那様。如何  
 しいヤ事おがら。數代お出入の殿様の。御家來たる彼方々私方で羨望の物の。此度に限らず。  
 吟味は吟味と致した上。指上ませねバ千に一つ。鹿相が御坐りました時の。此徳右衛門めが  
 越度泊り合した彼方のお茶。ナ御如才の有ん様の無れ共めつたに。ナヤ。と目顔で知せば  
 岩代多喜太。ヤアいらざる己が馬鹿念身が入魂の萩の祐仙。茶は毒藥でも仕込有かと疑ふて  
 ナのか「ア、イヤ全く左様での御座りませぬと。ム、然らば差留。駒澤殿の手前といひ。サ  
 今一言語て見よ。眞二つに打放すと。さつバ廻せば祐仙押留先々お待させ貴公様の御  
 立腹の御尤あれと。徳右衛門のナ所も又一理有。ヤ斯致そ下拙が毒見仕り。其上にて駒澤様  
 へさし上ませふ。何と徳右衛門。それで云分の有まいがや。イヤモ御自分よお毒見なされる  
 程。惜な事の御座りませぬ「ナ、そふ有ふ」。が其替り。何事もない時の。此祐仙が了簡せ  
 ぬが合點か「ヤモ夫は是非及びませぬ。御存分に成升ふ。面白く。急度詞を誓ふたぞよ  
 」。ドレ毒味を致そふと。茶碗取寄。四邊をささるく見る振よて。解藥の丸子。竊と吞。然あら  
 ぬ顔して件の薄茶。車も残さず吞盡さ「ナ、ナ、イヤ徳右衛門ちよつと出や。見たか。此通り







屈めて入來れば。此方の扇押隠し「サ、亭主光刻の扱々きつい働き。危き難を遁しも全く其方志。サ是へく」ハ、冥加に餘る御詞。エ、最前此方へ參る砌。何か三人密々咄し。合點行すと忍び聞ば。病れ藥を茶に交て。貴君様へ差上んとのア、コリヤサア怒ろしい工みア、憎さも憎し。直ぐお申上ふと存じたれど。夫での何様を科人が出來ふも知ぬと存じ。へ、幸先日。慰に求ました笑ひ藥。アコレ幸と病れ藥と取替たを。知すに吞だ先刻の時宜。是後連も旦那様。御油斷の成ませぬぞへ「ホ、其義の某も。疾く承知致した。マ夫の格別。此衝立も有朝顔の唱歌の。何人の手跡。如何成事からお身が手入しど「エ、それで御座り升か。其歌は付てアノ哀れな咄し「エ、元の中國邊歴々の娘とふ成が。何やら尋る人が有連。親元を家出し。夫より方々を流勞して。果の竟々目を泣置し。跡の月迄の濱松邊よ。其歌を諷ふて補乞。所に又國元から。所縁の女子が尋て來て逢せした。が其女子も程なふ病境。夫から又一人不し。此邊其歌を諷ふて歩きましたが。何が盲目でこそあれ。器量の好し。聲の美し。見る程の者がいぢらしがり。朝顔くと云て。其歌を知ぬ者の御座りませぬ。私も餘の不儀さに。此宿も足と留させ。今での宿やくのお客の伽何と「マア不仕合せ者も有物で御座り升と。涙片手の物語りも。心よひしと應ゆる駒澤。もし云替せし我妻かと。蕭く胸を押鎮め「ム、夫の切哀れな咄し。身も今宵の何とやら物淋い。鬱散の爲其女を。呼寄る事の成まいか「イヤモ何が扱お安い事。只今呼に遣し升。お慰みお琴か三味。「ム、何分よきに頼み入と。云の子細の有ぞ共。えらぬ佛氣徳右衛門。尻輕よこそ立て行。跡へ相役岩代多喜太のさくくと座み直り「ヤ駒澤氏。嘸御退屈で御座らふ「コレハく岩代氏。殊の外お早い事で御座ると。陽の解ても解やらぬ。前垂掛の下女お鍋。次の間に手を突へ「サ、只今朝顔どのが見へました。





是へ通しましよのいな「ナニ朝顔と何者」アイヤ此道中で琴三味を弾旅の然を思ひ  
 る豎女とやら。拙者も何の物淋しう御座れば、些琴でも聞ふと存じ、琴を頼呼寄まして御  
 座る「アイヤそりや止みなされい」「ト、又何故か」「サレバサ先刻身共が知替たる、秋の祐仙、  
 同席如何と云れぬ貴殿。乞食をバ座敷へ通され間敷のい「ハテ高のしれた口くら女。まん  
 ざら怪しいナツレ茶箱も持參致すまい」と云つへい返しよ。ぎつくりと。言句に詰れと減す  
 口左程御所望あれバ兎も角も併座敷へ叶ぬ。庭へ呼出し。琴なと三味を弾し召れて、  
 早く此場と退歸されよと。飽意地持つ邪曲者。寄す障す駒澤が。差圖にお鍋が心得て「朝顔  
 どの召升る。朝顔どの」と呼立る。無慙あるか秋月の娘深雪の身も積る。歎きの数の重  
 りて。罇失ふ目なし鳥。杖柱共頼てし。淺香の腕く朝露と。消残りたる身一つは道小捨り  
 縁先の。飛石探る足元も。危き木曾の丸木橋。渡り。苦しき風情あて。漸坐して手を突へ「石中  
 したの。此お坐敷で御坐り升る。拙い調もお笑ひ草。お耻もじさまやと會釋する。顔も深雪が  
 馴の果。不便の者やと。せぐりける涙香込扣へ居る。岩代ハ夫共老らず「ヤア見苦き其さ  
 まで。我々が目通りへ來さば。聞及んだる朝顔めな。エ、さりり立て去おらふ「アイヤ  
 く岩代氏。左様もぎどうに仰られぬ。此方に呼寄たればこそ。思ひがけ無ふ。アイヤ思ひが  
 けのふ來た物を。呵るハ武士の情も有すコリヤ」女。太儀ながら其朝顔とやらの歌サ、早  
 く颯ふて聞せいと。望む心の千万無量。知ぬ岩代頼ふくらし「切々駒澤氏ハアイヤ甚い御  
 執心。コリヤ」目盲何成共エ、颯へ「サ、早く」ハ「ハ」颯ひ升るで御座り升と。  
 焦るハ夫の有ど共。知ぬ目くらの探り手に。戀ゆへ心盡し琴。誰かの愛を斗爲吟の。糸より細  
 き指先にさす爪さへも入つ橋の。賽れ果たる身と啣ち涙に。曇る爪しらべ「露のひぬまの朝

顔を。てらす日かげのつれなきに。哀れ一ひら雨のはらくと。ふれかし「夫を暮る音律  
 の。我々が身にも思ひやられて。思はずも感涙致した。のふ岩代殿「いか様。琴と云器量と云。  
 イヤモ中々感心仕る。アイヤナニ朝顔とやら。其所ハ定めて冷るで有ふ。身共が傍で今一曲。サ  
 アく所望だく「アイヤ岩代殿。もふ赦してお遣なされい「去迎ハ駒澤氏。身共が望むを留  
 さつまやるハ。ソリヤ意地の悪いとサ物「イヤ左様でハ御座らねど。彼も定て勞れませふと  
 存て「ハア、然らば曲ハ止まして「コリヤ」女。其方も腹からの非人でも有まい身の上  
 しも又一興。颯して聞せ。サ、何だく「ハ」ハ「ハ」問て下さり升。お詞にあまいお断しサ  
 すも恥しあがら。元私ハ中國生れ。様子有て上方住居。過し卯月の中空に都の辰己宇治の  
 船。こがれ寄べの盛符思ひ初たる戀人と。語らふ問さへ夏の夜の。短い契りの本意ない別れ。  
 所尋る便さへ。思ふに任せぬ國の迎ひ。親々に誘引れ。難波の浦を船出して。身も尽したる愛  
 思ひ。泣て明石の風待よたま。逢ハ逢なから。強面嵐に吹分られ。國ハ歸れば父母の。思ひ  
 も寄ぬ夫定め。立る標を破らじと。屋敷を抜て數々の。憂目を凌ぎ都路へ登つて聞を其人ハ。  
 東の旅と聞悲しさを又も都を迷ひ出。いつハ廻り逢坂の。關路を跡ハ近江路や。みの尾張さ  
 へ定めなき。戀しく目に泣潰し。物の黒白も水とりの。陸に呻吟悲しさを。何の世いか成  
 報ハもて。重ねくの歎きの數ハ隣み玉へと計めて。聲を忍びて歎きける「サ扱哀れお咄し。  
 併男日照もあいな世界にエ、氣の陔い女だか。イヤ最しもんた咄しで。氣の滅入た。寐酒でも  
 給へ氣を晴そふ。イヤナニ女暇をくれる立歸れ「ハ」ハ「ハ」有難ふ御座り升左様されバ客様  
 にもふお暇升「サ、朝顔とやら太儀で有た初て聞た身の上咄し。若其夫が聞あらバ。嘸満足  
 に思で有う。ノウ岩代殿「左様くハ、ア是ハマア御深切な詞。有難ふ存升と。杖探り取







尾ふて追て行。名も高き。街道一の大井川。篠と乱して降雨に。打交たる雷電。張り落る水音。物凄くも。又凄まじく。夫を慕ふ念力に。道の難所も見へぬ目も。厭ひぬ深雪が輾つ轉びつ。漸爰は川の傍。ノッ川越達駒澤次郎左衛門様と云ふ侍。もふ川をお越さされたか。未か。聞して。云ふ聲さへも息切の。聲ふ川越口々。チ、其侍の今の先渡つ。俄の大水で。川が留つた。笑止くど計にて皆ちり。行過る「ヤアナニ川が留つた。ハ、ア悲しやと張詰し。力も落て伏轉び。前後不覺に泣けるが。又起直つて見ぬ目に。空を白眼で。天道様エ、聞へませぬ。〜〜。哩な。此年月の艱難辛苦も。何卒最一度其人は。逢して給べと片時も。祈らぬ間迎もない物を。今日に限つて此大雨。川留とい。エ、何事か。思へば此身の先の世で。いか成事を罪せしぞ。扱もく亡状さ。焦れく。其人は。逢ても知らぬ盲目の。此身のいか成悪業ぞや。夫の跡を戀慕ひ。石も成たる松浦瀧。領巾振る山の悲しみも。身は比較て。數ならず。三千世界を尋ても。此様な果因が又と世も有べきか。口説立拳を握り身を震ひし。涕泣焦れ歎きし。餘所の。見る目も衰れなり。漸有て起直り。チ、そふじや。〜。迎も添れぬ身の業因。此川水の増りし。所詮死との事成べし。未來で添と樂しみに。爰を三途の岸と定め。弘誓の船に法の道。急がんと泣々も夫を戀し小石の數。袖や袂に拾ひこみなむ。彌陀佛の聲諸共。既も飛んと其所へ「ヤレお待なされ深雪様と聲よ。恠りけしと内。欠來る關助徳右衛門。あつてし儘の歩行既足。斯と見るが抱留。マア〜。お待なされませ。〜。ヤ〜。誰か。いゝらねと。放して〜。マア〜。待たやれ朝顔殿。チ、私も此方様の身が氣遣ひさふ走つて來。コレ關助殿とやらが見へたぞや。ハ、ア下郎め。御座り升マア〜。氣をお静め。さされませと。無理も手を取抱退れ。ハ、ア、そふいふ聲の關助か。ハ、アエ、運か

つた〜。わいの。此年月の艱難して。尋焦れた阿曾次郎様。折角逢ふに目くらの悲しさ。それ共。去らず別れたれど。何やらお聲が氣が〜。戻つて聞ばやつぱり其人。己やれ退付ふと。跡追ふて來たれば此川留。エ、何爲すのふ〜。チ、お道理だ〜。拙者めも。貴嬢様の行衛を尋廻る内。一昨日の夜の夢。淺香殿は逢。則あきた様の島田の宿。戎や徳右衛門方は御座ると。云しやると思へば目が覺。シヤ何でも不審と。夜を日と繼で。參つた甲斐有て。己の事危あい所を。ヤレ〜。婚しや。下郎めが目に。かゝる上。お氣遣ひをされすな。駒澤様に添せや。併淺香殿。坂東順禮と成て。東海道へ尋て見へる筈。かお逢ふされしかな。サレハイノ其淺香は跡の月。濱松で廻り逢ふが。其夜悪者も出合數か所の手疵。死る今端に私を呼。中山の邊に。私か産の親。古部三郎兵衛と云人あり。此守り刀を證據に。尋行秋月弓之助が娘と。名告て逢と教へ。可愛や終は死ふやつ。哩の。ム、スリヤ淺香殿に。最期とや。ホイはつと計。驚く内。始終聞居る徳右衛門。ム、そんなら前。秋月弓之助殿の息女様。又淺香と云。我娘で有たか。マア私事。其尋なざる。古部三郎兵衛と云者。則あきた様の祖父。秋月兵部様に。三代相恩。若氣の誤り奥女中と忍び合。お手打に成所を。弓之助様に助られ女諸共國を立退。産落せしが女子の子。貧苦の中に育る内。二つの年に母の病死。男の手で育もならず。伯母が方へ。此短刀を添て養子に遣りしが。廻り〜。思はずも。親が命を助られし。秋月様へお奉公。死でも忠義と忘れず。導かふつ。チ、出かしおつたか。此上の深雪様へ三郎兵衛が土産と。件の短刀。抜放し。腹にぐつと突立れば。關助驚き。押留め。コレ何で其方。此最期。死でお役立事か。譯を聞して下されと。云。苦痛聲を上。ヤレ歎かれあ方々。最前駒澤様の物語。唐土傳來の目藥。甲子の年の。男子の生血にて服する



時いか成る眼病も、即座に平癒との事。某甲子の生れ成バ。我血沙を以て伴の。薬を調合し。早々彼方へ進めなされ。サ早く。實も。關助。用意の水香取出し。手負の血沙受生。泣入る深雪が懐の。妙薬取出し差寄せ。深雪受取我夫の情の餘る賜ものと。押戴さ。只一口お吞干バ不思議や。忽兩眼開き。蟻の這み透見へ透よど。深雪が嬉しさ人々も。悦び合ぞ道理也。ア、嬉しや。最早此世に望を。誰彼さらバと刀引廻し。笛のくさを勿切て。名のみ流る、大井川。水の泡とぞ成にけり。跡や枕は取廻り。わつと計り泣深雪。露のひぬ問の朝顔も。開きし此目。盲龜の浮木優曇華の。花お増りし夫の賜。二つに。我故此世も亡人かと。取付歎くを關助が。勇に亡骸手昇の興。早明渡る鳥の聲山田の。惠端増り。重れる朝顔物語。末の。世迄も著然し。

○歸り咲香妻の路草

咲た櫻にあせ駒繫ぐ。駒がいさめバ花がらる。其駒澤を懸幕ふ。櫻にあらで朝顔が。姿も昔にかへり咲。髪も島田と立か弓引も。契らぬ海道に。誰も人目を大井川。跡は見付や濱松の。憂艱難も引かへて。昔語と荒井かへ。白須か掛て二川や。精悼らまげふちよ。歩行し姿も吉田御油。赤坂宿を打過て。藤川繩手に休憩けり。チ、實に私とした事が。夫は逢が嬉しさに供も構はず虚々と。先へ歩むと思ひしが此關助の何してぞ。チ、イ。と打招けバ。跡に後れて關助が。双紙の鎗を振擡げ。アリヤサヨリヤサヨイヤサとつけかけ。先避るおあべが。かいもち。ねれたら。もてこい。合點じや。夕べも三百騎込だ。仕く來い。先避い振れ。振こんだ戀し殿御の彼でも無いか。是でも無いか。ナイ。ぬこそ道理也。た。違ぬもの。貞女と忠義。追付廻り岡崎や。願て鳴海と關助が。終りし言の葉に。

深雪嬉しく。チ、關助か遅かりし。其方を跡ふり捨て。歩むも女我勝と。無や心に可笑か。る。面目ないと詫言ふ。何が扱々。拙者奴も。彼方様の御供や。駒澤様と御祝言有や。此跡の宿の氏神の。縁結びと聞し故。心願こめて。チ、それ嬉し。去きから。其方も兼て知る通り夫は添われぬ因果の縁。死る所を助りて。二度東の我夫に。逢へば右して左して。心うちいめもつれ合。さめて。からんだ松の蔭。其みどり子を産落し。ねん。ころ。んや。ねんねが。もりのどこへいた。何處と知れた其人に。逢て恨を何とま。如何云て宜かるやら。何と庄野の憂思ひ。チ、お道理。あきた様より關助が。三々九度ふり御座れども。追付婦儀の取結び。そのとき罷奴の晴れ奉公。ふり込。御祝儀の。中に見事な花の鎗。駒の手綱を拍へ綱。揃へやり持。花の鎗並松の音もゆたかに。ザンザン。チ、ヤン。志やんと納めた。ハ、ハ、勇笑ふて行先。伊勢路と伊賀の國境。榮へ榮ふる坂の下。里の童が聲。に。朝顔の。晨は咲て夕に。露の命も戀故あらバ私しや。厭いぬ。いとやせぬ。ソレ。とよ。じやいさ。朝顔の名にこそ立れ幾秋も。ほみの心も色ゆへあらバ私しや厭いぬ。いとやせぬ。ソレ。とよ。さうじやいさ。調ふ聲。身の上に。ひつしと思ひ石部川。花香もこもる梅の木を。たどりて急ぐ道の邊。咲亂れたる朝顔に。ひれ飛ぶ蝶のおもしろく。浮れ。て主従が浪花路として急ぎ行。

○駒澤上屋舗の段

浮る雲も壁へたる。不義の富貴お引かへて。月日を拵ふ村雲も。今時を得て晴渡り。新造る普請の結構。玉を欺く駒澤が。直成心の上やしき。殊も今日殿のお入りとさ。めいて。妙。した取々に。掃除仕廻て寄こぞり。コレ菊野今日殿様のお入とて。此やうも結構を御座敷。



を掃除して。美麗な事じや無いかいのふ「サイノ其きれいな次手よ。爰の旦那次郎左衛門。此廣い大坂中も。早一人とない器量よし。彼様な殿御と夫に持。奥様に成る人。仕合せ物じや無いかいのと。ちよつと寄ても男の噂。口姦しき端女の習とこそ見へにけり。程なく殿様御入と。下部が知らせぬ。共ソリヤコッお成じや旦那様よ。や上ふと打連て。皆奥へ入にけり。大内之助義興の。先つ比より東國ふて大友の殘黨を誅伐し。本國へ歸館有。路次の序は駒澤が上屋舖へぞ成有。お供に岩代多喜太。肩臂張し入來る。主駒澤次郎左衛門。へり下り頭をさげ「殿の益御機嫌よく御座遊され。愚臣が弊居へお成りとい。冥加至極難有さ仕合と。手を突バ。此程大友の殘黨等。近國に徘徊致よし軍慮をめぐらし。只一戰に責討んと。評議區々。汝も其旨相心得。一乘に勝利を得る術有や。何如くと有ければ。岩代へえや。くくり出。其軍危い。大友の殘黨迎侮り難し今諸國へ。討漏たる殘黨共。スハ合戦と聞ならバ。蟻の如くお集り。蜂の如くに起あバ。由々しき大事あらん。サ其時に味方の小勢。壁の鶏卵もつて。盤石と打様あもの。其様も危い事爲より。又大磯へ行て。傾城買が増で有ふと。己が惡事をえらばけに。大友一味の奸曲を。夫と駒澤心は點頭「軍の事跡での評議。先今日の御變散を晴さん爲。奥の亭にて鹿茶一服。献上いたし奉り度し。いざ御入下さるべしと。や上れば義興公。徐々立て入給ふ。早日も西へ傾て。黄昏近き秋の空。心も息喘關助が。忠義一圖に深雪をバ。伴ふ心のいとくと。漸爰着まけり。關助の小腰を屈め「ハイ御免下さりませふ。私事の。蘇州岸戸の家老。秋月弓之助が家來。關助と申奴めで御坐り升。殿方は御取次下されませうと。云聲漏て次郎左衛門。一間の内より立出る。見るに深雪の飛立婦し。喃あつかしや我夫と。抱着たさ今更お。透りを見やりもぢくと。赤らむ顔の

色も香も。盡せぬ奇縁ぞわりあけれ。次郎左衛門打解て「イヤナニ其方が聞及びし關助とやらか。長々の介抱。何角の世話。ホ、過分あるや。イヤノウ深雪。日外島田の宿よて。不思議と廻り逢たれど。大切ある殿のお供先。同家中の手前と云。故と其場へえらぬ。其砌徳右衛門と頼み。其方と與へし藥あて。眼病も平癒せしかと。云バ深雪の今更よ。過越かたの憂難難。思ひ出して回答。派先立計。關助の引取て「イヤモ夫は付ても。お咄しや上れば長々しい事。仰の通り少しも違はず御病氣本腹。其場所へ参り合せ。直様是迄御供。駒澤標の御さげんの躰を拜しまして。下郎めい安堵。深雪様にの嚙くお嬉しう御座りませふと互ひに顔と見合せて。悦ひ合こそ道理。始終を聞て次郎左衛門「ホ、ウ是迄難難心。口して。廻り逢たも盡せぬ縁し。幸今日の殿のお成なれば。委細の譯を言上し。お免許有た其上。友白髪迄添遂ん。が何角咄しの身が居間で。關助共お先上と。詞に二人が飛立計。春待かねし驚が。梅も初音の心地して。悦び入んと爲る所へ「ヤレマテ汝等。大内之助義興。得より是と承知せりと。悠然として立出給ひ。駒澤に打向ひ。イヘナニ夫成深雪とやらん。岸戸の家來秋月弓之助が娘とかや。今改めて夫婦とござん。我目通りで祝言せよ。ソレく用意と御下知に。はつと答て持出る。長柄の銚子蝶花形。千代も替らぬ高砂の。昆上の松こそ愛たけれ。悦び納る其所へ。様子を得と岩代多喜太。一間の内よりのさへり出。目くら乞食の朝顔も。今での武家の御内實。前代未聞の此せんさく。トリヤ拙者も罷て又後刻。御祝儀ヤさん駒澤殿と。何が有意地持詞を殘し。立歸らんと爲る所へ「ヤア。大友一味の反逆人其所動と。呼かけられ。胸り振り向其所へ「ヤア。次郎左衛門殿暫くお扣下さるべし。駒澤三郎春次。夫へ参つて明白にや上んと云つ。出る若侍。見る岩代詰寄て「ヤア汝の幼少の時。透電きた



る駒澤了庵が實子庄一郎。シテ其方が證人との「ホ、ウ某日外摩耶が嶽にて。浮洲の仁三  
 と仮名して。大友に付隨ひ。術を待て打亡し。藥王樹を奪返し。守護し奉りて。國元へ立歸る  
 。其砌播州舞子の濱の松原にて。山岡玄蕃方。其方へ内通の飛脚に出合。メ上て狀箱引取。よ  
 く見れば汝が工み。又先刻其方が。懷中を取落し。コレ此一通。開き見れば。山口へ  
 合体し。る悪事の次第。委細に知たる此文体。日外嶋田の宿にて浪人を語らひ。下やへ忍は  
 せ置。毒藥を持て某を。害せんと計る人非人。何と是でも返答有や「サアそれの「此書面の云  
 譯有や「サア夫のサアサア。返答いかよ岩代と。流る、水の辨舌も實駒澤了庵が。子  
 息とこそ知られけり。岩代の破れかぶれ。「モウ是迄と拔放し。切て懸ると關助隔て。駒澤  
 繼へ御目見へに。己が首の此奴が。婚禮の御祝儀に貰ふて吳んと立懸る「ヤア如小才も一文  
 奴。ばらして吳んと切懸れば。此方も心得渡り合。暫く時をぞ移しける。先を取られて。岩代  
 の。さちろく所を付入て。苦もあく首と打落せば「ホ、出かしたく。關助とやら。下郎あが  
 らも。適ういやつ。以後の三百石を與へ。侍に取立吳ん。又庄一郎の今方。駒澤了助と名を  
 改め。猶忠勤を勵むべしと。残る方なき大將が。仰に人々慶儀の感涙。智仁勇有君子國。例を  
 爰に竹本の。其一ふしよ千代こめて。語傳へし物語。文才清き翠松。かはらぬ色の若枝をあら  
 ばぬ御代ずめでたけれ

山田榮山子 遺稿  
 翠松園主人 校補

嘉永三載 戌正月 發板  
 生寫朝顔日記終

明治二十二年十月廿九日印刷  
 同 年十月三十日出版

發行者 中村芳松  
 大阪市南區末吉橋通四丁目八十九番屋敷

印刷者 大垣彌太郎  
 大阪市高麗橋五丁目四十五番屋敷

發賣所 競屋  
 大阪市南區心齋橋北詰一番地





通 訊  
電 報  
電 話  
電 報  
電 話

電 報  
電 話  
電 報  
電 話

電 報  
電 話  
電 報  
電 話

電 報  
電 話  
電 報  
電 話



